

平 畑 遺 跡 八 幡 原 遺 跡

—農村基盤総合整備事業上黒田東部地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1988.3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

平 畑 遺 跡 八 幡 原 遺 跡

—農村基盤総合整備事業上黒田東部地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1988.3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

平生・八幡原遺跡全貌



序

昭和62年度において農村基盤総合整備事業により上黒田東部地区のほ場整備4.8haを実施することになりました。

本地区は、上段山麓に近いほゞ中央部にあり、緩やかに傾斜した畑地帯と水田地帯であります。近くに八幡神社があり、地形的にも謂の有りそうな状況であり「平畠・八幡原遺跡」として指定されておりますので、工事に先立ちまして発掘調査を行ないました。調査が進むにつれ、縄文時代の住居址が現われ、その中には、当方では大変珍らしい大小の深鉢や、埋甕が出土するなど、想像以上の成果が得られ、町の埋蔵文化財として大切に記録保存されることは大変御同慶にたえないところであります。

当遺跡の発掘調査は、今村善興先生に担当していただきました。工事に先立つ関係で、大変急な発掘作業であり、真夏の暑い中、公私共に大変お忙しいにも拘らず工事の着工に間に合せていただきましたことにつきまして、厚く御礼申し上げます。

なお、今村先生の御指導により、大変暑い中を、発掘調査に御協力いただきました作業員の方々の御尽力に対しましても、深く感謝を申し上げる次第であります。

昭和63年3月

上郷町長　山　田　隆　士

例　　言

1. 本報告書は、昭和62年度上郷町上黒田東部地区農村基盤整備事業に伴う「八幡原・平畠遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。
2. 現地の発掘調査作業指導は、調査団長今村、調査補助員林貢・林敏・米山が担当している。
3. 他遺跡の発掘作業終了が昭和63年1月20日で、遺物整理・調査報告書作成期間がきわめて少ないため遺構図は全部載録したが、遺物については代表的なものを選んで図化載録し、他の遺物については写真で報告している。
4. 完形土器の測量にあたっては、写真測図を採用し加筆整図している。
5. 本書の作成にあたり現地での計測・記録図の作成は今村・林・米山があたり、土器計測は米山、石器計測は福田、遺構図の作図・整図は整理作業員福田・今村の協力を得て今村・米山があたっている。
6. 現地での写真撮影は今村が担当し、遺物の写真撮影は唐木孝治氏に依頼した。
7. 本書の編集・報文の執筆は今村があたったが、余裕期間が不足していて資料紹介程度に留まっている。
8. 出土遺物・記録図面は、一括して上郷町歴史民俗資料館に展示・保管されている。

目 次

序	上郷町長 山田 隆士	
例 言		
目 次		
I 発掘調査の経過		1
1 調査の経過		1
2 調査組織		3
II 八幡原・平畠遺跡の立地と環境		5
1 位置と地形		5
2 歴史的環境		5
III 発掘調査の結果		9
1 遺跡の概要		9
2 遺構と遺物		11
1) 縄文時代中期・後期		11
(1) 1号住居址		11
(2) 3号住居址		22
(3) 縄文時代後期土器集中地		24
(4) D2地区土坑群		24
(5) D1地区土坑群		24
(6) C地区土坑群		27
(7) その他の縄文時代の遺物		28
2) 弥生時代後期		28
(1) 2号住居址		28
(2) 4号住居址		31
(3) 溝A・Bとその他の溝状遺構		32
3) 古墳・平安時代、中近世の遺物		32
IV 調査のまとめ		35
1 検出された遺構・遺物の概要		35
2 縄文時代1・3号住居址の特長		35
3 弥生時代後期住居址の特長		36
4 八幡原遺跡と平畠遺跡の位置付け		36
後 記		61

(図版目次)

第1図	D 1・D 2 地区調査地	2
第2図	八幡原・平畠遺跡位置図	6
第3図	八幡原・平畠遺跡周辺遺跡図	7
第4図	八幡原・平畠遺跡構成配置図	10
第5図	1号住居址完形土器出土位置と 出土土器	(13)
第6図	1号住居址、埋甕断面図	13
第7図	1号住居址出土埋甕(1)	14
第8図	1号住居址出土土器(2)	15
第9図	1号住居址出土土器(3)	16
第10図	1号住居址出土土器(4)	17
第11図	1号住居址出土土器(5)	18
第12図	1号住居址出土土器(6)	19
第13図	1号住居址出土石器	20
第14図	1号・3号住居址出土石器	21
第15図	3号住居址と出土土器	23
第16図	D 2 地区土器集中地と土坑群	25
第17図	D 1 地区土坑群	26
第18図	2号住居址と出土土器	29
第19図	4号住居址	30
第20図	B地区溝A・B・C・D	33
第21図	C地区土坑群	34

(写図目次)

写図1	八幡原・平畠遺跡の遠望	37
写図2	1号住居址	38
写図3	1号住居址土器出土状況	39
写図4	1号住居址の石甕い炉	40
写図5	1号住居址と壁外の土器出土状況	41
写図6	1号住居址逆位の埋甕	42
写図7	1号住居址埋甕の断ち割り調査	43
写図8	1号住居址埋甕1	44
写図9	1号住居址出土土器(1)	45
写図10	1号住居址出土土器(2)	46
写図11	1号住居址出土土器(3)	47
写図12	1・3号住居址、その他の出土石 器	48
写図13	3号住居址	49
写図14	3号住居址石甕い炉・土器出土状 況	50
写図15	3号住居址埋甕出土状況	51
写図16	3号住居址出土土器	52
写図17	D 1 地区土坑群	53
写図18	D 1・D 2 地区土坑群	54
写図19	C地区土坑4と石棒出土状況	55
写図20	2号住居址、炭化材・埋甕炉1	56
写図21	4号住居址、南側土坑・埋甕炉	57
写図22	2・4号住居址出土遺物、C地区 土坑4の石棒	58
写図23	B地区溝A・B	59
写図24	C地区土坑4、D 2 繩文時代後期 土器集中地ほかの出土土器、調査風 景	60

I 発掘調査の経過

1 調査の経過

昭和61年11月、上郷町産業課の主体事業として農村基盤整備事業上黒田東部地区の土地改良事業計画に先立ち、上郷町産業課・教育委員会・県教委文化課による現地協議が行なわれ、事業地内に平畠遺跡が該当するため、事前の緊急発掘調査が決定された。

昭和62年度には上郷町内ではこの整備事業のはかに、下黒田中部地区小規模排水特別事業・大明神地区土地改良総合整備事業・南条地区土地改良総合整備事業・別府下河原小手抜地区地域農業拠点整備事業等があり、さらに町道新設・改良事業も多く、該当する遺跡の数は10か所以上に及んだ。そのために、調査体制の確立が検討され、専任職員が新たに採用され、埋蔵文化財調査委員会が組織された。

昭和62年4月10日、第1回「上郷町埋蔵文化財調査委員会」が開かれ、調査委員会の規約・組織が決定され、年度の発掘調査が開始されている。その後の検討により該当する遺跡は八幡原遺跡も含まれることが分かり、調査遺跡は八幡原・平畠遺跡となっている。

八幡原・平畠遺跡の発掘調査は、昭和62年6月2日に開始されている。6月1日に飯沼丹保遺跡から資材を運搬し、6月2日に基地設営、地域が広いため道路建設予定地を中心に表面採集調査をする。第4図遺構配置図にみられるように事業地のほぼ中央を南北に走る町道（基点No.0～No.2）を挟んで西にA・D・E地区、東をB・C地区とし、北の坂が沿いの道路は低地のため除外した。遺物はA～E地区全域から採集されたが、D地区・C地区の東に多かった。

6月3日にA地区で5グリットを調査したが、小さな土坑1と近世陶器の集中地を検出した。

6月4日からはB・C地区の調査に入る。道路予定地は作物があるため、旧道を主体に東西・南北にグリット掘りをして、B地区では弥生時代後期の遺物を含む溝A・B、C地区では砂質土の多い溝を発見したが果樹の収穫前のため一時調査を中断する。

6月5日にD地区道路沿いの梅畠の一部を試掘したところ縄文時代の土器集中がみられたので、地権者篠田茂三助役の好意によりこの地区的グリット掘りに入る。D2地区のグリットは方向を真北にとり3266と3268番地でD1・D2を分けた。3266内を北に向かう道路予定地を含めて20個のグリットを6月10日までに掘った。北ほど遺物出土は少なく南道路沿いに遺物が集中した。

6月11日からは南側8列迄A～Jにかけて人力で拡張した。CからJにかけて縄文時代後期の土器が集中し、特にGからJの集中度は特別高かった。出土地点・層位を記録しながら6月19日迄順次掘り下げ、1号住居址のプランと西側に2号住居址を発見した。

6月22日からD1地区地権者篠田英一氏のご好意により、3268番地のグリット掘りに入る。住居址・土坑の発見があったので、6月25日に重機により排土し整地作業をする。3号住居址と土坑群を確認する。

7月4日から1号・3号住居址の検出作業に入る。1号住居址は完形・半完形の土器が多く、

土器石器の出土も多い。石圓い炉も検出され、南側に逆位の埋甕も発見された。3号住居址でも完形土器が出土し、石圓い炉が検出されている。南側の土坑群の検出もすすめている。

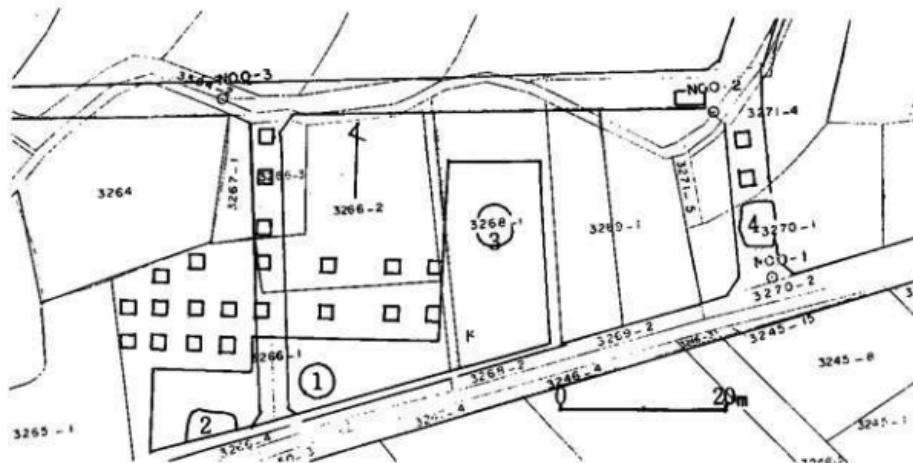
7月10日にはD1・No0-1から北へ行く道路新設予定地のグリット掘りをし、弥生時代後期4号住居址と土坑を発見している。それと同時にC地区のグリット掘りも進め溝1・2が発見されているが、砂質土の堆積する小さい流路のようであったので拡張はしないで、溝A・B・Cの検出作業をした。

7月23日からはD1・D2地区に集中して1号住居址の床面検出・D1地区の土坑の検出を進める。7月27日から3266梅畠の西側のグリット掘りをしたが、土器出土は少なくピットが検出されただけである。

7月29日に重機により2・4号住居址の周辺を排土し、検出作業に入ると同時に、1・3号住居址の埋甕断面調査に入る。1号住居址の埋甕1は、70cmもあって調査に手間取り、8月3日に取り上げるときは見学者も多く歎声のなかで取り上げられた。3号住居址でも深いピットの石の下から小さい埋甕(1)が発見され、埋甕ブームに沸いた。2号住居址は火災にあった住居址で炭化材の横倒しが多く、その検出・記録には米山・堀内が苦労している。

8月6日には2号住居址の埋甕炉が検出され、8月7日には高屋遺跡の調査を終えた岡田調査員・桐生・木下の応援を得て2号住居址の埋甕炉・地床炉の検出測量、3号住居址の埋甕の検出測量をした。検出作業中につづいて埋甕2・3も発見されている。

8月10日には米山・堀内は測量作業の继续、本隊は飯沼南原遺跡調査に入る。8月12日から再び本隊も合流して、2・4号住居址の検出、C地区北側の道路予定地のグリット掘りをして、D3のところに土坑群が発見され、土坑4は深く土器出土も多く大形の土坑であった。Tからは近世の堅穴に付随する遺構の一部が検出されている。8月20日現地作業を終了している。



2 調査組織

(1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会

① 規約

(設置)

第1条 この会は、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」（以下委員会という）と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

(目的)

第2条 この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。
- (2) 土地所有者等の発掘承諾に関すること。
- (3) 発掘調査員及び作業員の確保に関すること。
- (4) そのほか目的達成に必要なこと。

(役職員)

第4条 この委員会に次の役職員を置く。

- (1) 顧問1名、会長1名、副会長2名、委員若干名、事務局員若干名
- (2) 顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会において互選する。
- (3) 委員は次の通りとする。
教育委員5名、文化財保護委員5名、考古学関係者3名、産業常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者
- (4) 事務局員は関係各課局の職員を充てる。

(役員の職務)

第5条 会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 この委員会の会議は、会長の招集により開催する。

(そのほか)

第7条 この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

付則

1. この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

(2) 役職員

顧問	山田 隆士（町長）	
委員長	北原 忠夫（教育委員会委員長～62. 9）	
	小室 伊作（同上 62. 10～）	
副委員長	北原 治人（産業常任委員長～62. 4）	
	岩崎 智道（同上 62. 5～）	
	小木曾英寿（文化財保護委員長）	
委員	小室 伊作（教育委員～62. 9）	牧野 光弥（文化財保護委員）
	北原 勝（教育委員）	麦島 正吉（同上）
	矢崎 和子（同上）	菊本 正義（同上）
	北原政治郎（同上 62. 10～）	稻垣 隆（同上）
	吉川 昭文（教育委員会教育長）	佐々木啓治（上黒田東部地区）
	平栗 弘（建設常任委員長～62. 4）	北原 治作（大明神地区）
	篠木 俊寛（同上 62. 5～）	中島 博男（下黒田中部地区）
	今村 善興（日本考古学協会員）	唐沢 富雄（南条地区）
	佐藤 駿信（同上）	島中 尚二（別府下河原地区）
	岡田 正彦（同上）	堀口 信幸（別府小手抜地区）
事務局員	吉川 昭文（教育委員会教育長）	北原 克司（産業課課長）
	菅沼 富雄（同上 事務局長）	岡田 清平（同上 新農構係長）
	吉川 勝一（同上 局長補佐）	中國 紘（同上 耕地係長）
	山下 誠一（同上 社会教育係）	鈴木 幹夫（同上 主査）
	今村 美和（同上）	

(2) 上郷町遺跡発掘調査団

調査団長	今村 善興（日本考古学協会員）					
調査主任	山下 誠一（教育委員会社会教育係）					
調査員	岡田 正彦（日本考古学会協会員）					
調査補助員	林 貢	林 敏	米山 義盛	伊藤 泉		
作業協力員	荒木 寿子	今村 俱栄	今村 春一	牛村いちゑ	岡田 元宏	
	上柳 久夫	加山 忠司	北林 覚男	櫛原 豊子	小林 薫	
	篠田せい子	島崎 泰三	清水 公司	瀬古 郁保	高橋 美鈴	
	玉置 巍	堀口 勇造	福田 千八	福田すえ子	堀内 英樹	
	吉川 佐一					

II 八幡原・平畠遺跡の立地と環境

1 位置と地形

長野県下伊那郡上郷町は、飯田盆地のほぼ中央に位置する。東は天龍川を挟んで喬木村に接し北は土曾川によって飯田市座光寺に、野底川上流では高森町・飯田市松川入に境している。鷲巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎町・松尾地籍とに接する範囲で、26haに及ぶ広大な地域を占める町である。

この地域を南流する天龍川とその支流によって形成されたいくつもの河岸段丘と、山麓には広大な扇状地の広がるところで、居住・農耕地域も広く現在は飯田市に隣接する衛星的住宅地域として発展しており、年々住宅・人口増加も著しい町である。この恵まれた自然環境により、原始時代・古代からの優れた生活舞台であって、後述のように埋蔵文化財包蔵地の多い地域の一つとして知られている。

伊那盆地全域に形成されている河岸段丘は、火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある多くの段丘は、火山灰土を含む洪積土壤の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、火山灰土がのらない冲積土壤のみられる低位段丘Ⅱに当たるものである。前二者は普通「上段」と呼ばれる下黒田・上黒田地籍にある各段丘面であり、後者は「下段」と呼ばれる飯沼・南条・別府下方地籍に形成される段丘面である。

この上段地域は、喬木村伊久間原の段丘「伊久間面」(低位段丘Ⅰ)に属する黒田地籍の段丘面が主で、野底川の扇状地が浸食されてできた段丘でもある。上黒田には特に扇状地が発達しているが、この扇状地は古い扇状地と新しい扇状地があって、何回にも重なって作られたものであるといわれる。下黒田の段丘と上黒田の段丘は基本的には同じ段丘面であるが、扇状地の形成過程や浸食の度合いによって高低差ができたようである。上黒田の上方には松尾八幡原段丘を模式地とする中位段丘八幡原面(C1)・中期扇状地もあるかと思われる。

上黒田中央地籍は黒田区の上方に当たり、野底川左岸から板が洞右岸にかけて形成された山麓扇状地で、東西500m、南北300m以上に及ぶ扇状台地で北上方に発達する米の原扇状地・西側に高く位置する柏原扇状地とともに上郷町の代表的な扇状地である。現在は中央自動車によって上下二分されているが合せれば更に大きな扇状地である。標高は中央自動車道沿いで570m、上黒田八幡社辺りで600mを測る。

2 歴史的環境

黒田地籍に古くから人が生活したことは、各地域に多くの遺物出土がみられることで実証され



第2図 八幡原・平畠遺跡位置図

○印 事業地

0

500



○ 事業地 1. 薬師前 2. 平烟 3. 八幡原 4. 五本木 5. 赤坂 6. 町張 7. ミカド

第3図 八幡原・平烟道路周辺遺跡図

る。歴史時代の古いことは分からぬが、諏訪上社史料によると長禄4年（寛正元年、1460）黒田の地頭座光寺貞近が、諏訪上社の五月会賀頭を勤めている。原の城に居城したと伝えられる黒田氏と座光寺上野城に居城した座光寺氏の関係はどうなのか、或る系図に書かれている上黒田に住む藤田・鈴柄氏、座光寺宮崎に住む宮崎氏の関係はどうなのか不詳なことが多いが、黒田地籍には相当勢力の強かった豪族の居住地があったと考えられる。

中世までは飯沼・南条・上下黒田によって飯沼郷が形成されていたものが、中世末か江戸時代初めに上黒田村・下黒田村・南条村として飯沼木郷から分離独立し、別府村はそれより以前に上飯田郷から分離した別府郷が、別府村となり明治七年まで続き、明治8年にこの五ヶ村に座光寺村が含まれて上郷村になっている。

上郷町の遺跡は、昭和57年度の町内詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32基・中世城跡3の合計104遺跡である。未登録の遺跡もいくらか残り、古社寺跡・狼煙台跡等を含めるとさらにこの数を上回ることになる。

上黒田地籍には、野底川上流右岸に八王子・姫宮・日影林遺跡、さらに上流左岸に堂ヶ入遺跡がある。やや下方中央自動車道を挟んで、上方に八幡原・平畑・薬師前・米ノ原遺跡があり、下方には町張・赤坂・五本木遺跡が並ぶ。

数年前には上郷町では発掘調査が行なわれた遺跡は少なかったが、上黒田地籍には中央自動車道用地内発掘調査が行なわれた赤坂遺跡、昭和55年福祉センター建設に伴う緊急発掘調査が最初の上郷町教育委員会の主体事業として行なわれた姫宮遺跡がある。姫宮遺跡では縄文時代早期の集石炉が検出され、平安時代の住居址のほかには縄文時代の住居址こそ発見されなかつたが土器の出土は多かった。赤坂遺跡では、近くに弥生時代の住居址が発見されていて、この時期の集落址発見が期待されたが、近世豎穴の検出に留まっている。

八幡原遺跡の対岸、日影林遺跡は以前に道路工事によって縄文時代中期中葉の土器が発見されていた。昭和61年度末から昭和62年度当初にかけて、民間住宅建設に伴う発掘調査が行なわれ、縄文時代後期の土器片が大量出土して、同時期の住居址2軒・70基以上の土坑群・平安時代の住居址が検出されている。

米ノ原遺跡は座光寺地籍とともに旧石器時代の遺物出土地とされているが、どの辺で出土したのか現在は確かめられていない。八幡原遺跡は大正時代から上郷町の遺跡中縄文時代の遺物の多量包含地と予測されている。昭和31年に北原氏の果樹園（3429番地）から平安時代灰釉陶器瓶・碗・杯形土器が出土し、八王子遺跡の灰釉陶器出土とともに上段地城灰釉陶器出土地として注目されている。平畑遺跡は中央自動車道を挟んで五本木遺跡に隣接する位置にあり、今回の調査によても下方ほど遺物出土が多いことからも、五本木遺跡とは同一の遺跡と考えられる。

平畑遺跡の北側は「柄が洞」から流れ出る柄が洞に面する低地であって、この奥の「柄が洞」には「寺屋敷」の地名が残り、円光寺が有ったと伝えられる。先の灰釉陶器出土・ほかに平安時代の和鏡出土地もあり、「薬師前」・「仏供免」の地名等注意したいところである。

III 発掘調査の結果

1 遺跡の概要

上黒田八幡原遺跡・平畠遺跡は中央自動車道西上方、南は野底川左岸台地上から北は柄が洞に面する中位段丘と扇状地が複合する広大な面で、西南から東北の長さ500m・南東から北西300mに及ぶ。薬師寺から上黒田八幡社へ通ずる町道の東から西一帯が八幡原遺跡で、その東側が平畠遺跡である。今回の基盤整備事業地は大部分が平畠遺跡であるが、西側に一部八幡原遺跡が掛かる。接点にあたる辺りは地形的な相違ではなく、同一遺跡のようである。

分布調査の結果は、第4図にみられるように事業地の大部分の地域から遺物が表採された。縄文時代の遺物は上方八幡原と平畠遺跡の接触地、D1・D2⑬～⑭、C⑮～⑯・⑰に多く両地区に夫々中心がありそうである。弥生時代の遺物は、八幡原遺跡に近い⑯～⑰・⑮～⑯に多くとくに⑯に目立っていた。古墳時代の遺物は極少なかったが、C地区④に高杯形土器片が見付かっている。平安時代の遺物は少量ではあるが、D地区⑪・⑫で拾っている。中世・近世の遺物は各地で拾えた。特に目立って多めのところは、②・③、⑪・⑫であった。①は低い位置にあるが埋め土作業中に常滑焼きの壺形土器片が出土している。

今回の農村基盤整備事業の事業内容は、数本に亘る道路建設が主であって耕地整理の掘削は少ないために、道路予定地と遺物多出土地、一部の私有地を借りて調査している。そのために極限定された範囲に留まっているが、各期に亘る遺構・遺物が存在することが分かった。調査の結果検出された遺物・遺構の概要は次のとおりである。

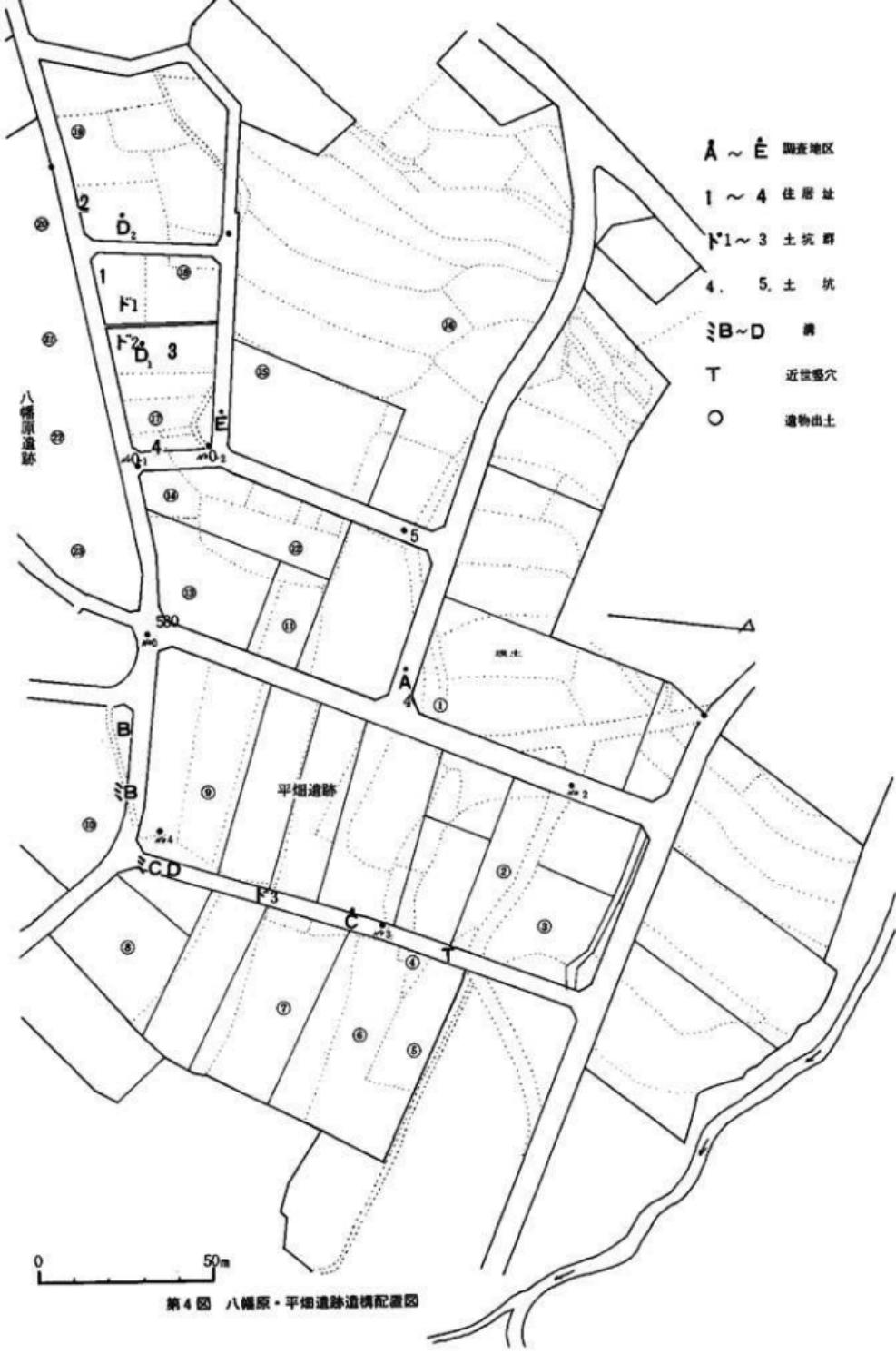
＜主な遺構＞

縄文時代中期後葉住居址2、縄文時代後期土器集中地1、縄文時代中期・後期・不詳の土坑74基、ロームマウンド2、弥生時代後期住居址2、弥生時代後期溝2、近世建物址の一部、時期不詳の溝址・溝状遺構4。（第4図遺構配置図）

＜主な遺物＞

縄文時代中期土器10以上、土器片4000以上、石器60、石棒1、縄文時代後期土器片200以上、弥生時代後期土器5、土器片200、石器10、古墳時代後期高杯片1、平安時代灰釉陶器片20、中世陶器片200。

縄文時代中期の住居址はD1・D2地区で夫々1軒検出されている。ともに後葉の住居址ではあるが、後期差があり同一集落のものではない。縄文時代後期の土器集中地の土器は、後期前葉のものである。場合によると中期末葉で近くの土坑につながる類かもしれない。D2からD1にかけて土坑群が検出されているが、土坑周辺・坑内から出土する土器は大部分が縄文時代中期のものである。なかには土坑の上部に石を配し、その下に土器片・石器が出土するものも多い。



焼土があって、黄褐色の土盛りを持ち、そのもとに掘り回めた穴をもつもので、ロームマウンドと名付けたものが2基ある。数多いなかには構築された土坑でないものもあるが、石の少ないこの地域では石の存在に注意が必要であろう。重機の排土作業によって上部の石が排除されたものもある。土坑の多くは縄文時代中期・後期のものかと思われる。

C地区の道路予定地の南側に7基の土坑群が検出されている。このなかの4号土坑は大きく深さも75cmもあって、縄文時代中期後葉の土器片が1個体分を含めて多量に出土し、坑底から石器や石棒の頭部が出土している。

弥生時代の住居址はD2・D1地区に夫々1軒ずつ検出されている。D2地区では近くに同一時期のものがあるかと思いグリット掘りを試みたが、北側のグリットで土器片が出土しただけで住居址の発見はなかった。D1地区では道路用地内で試みたが別のものは見付かっていない。全城調査ではないので確たることは言えないが、道路を挟んで南側に他の住居址があるのかもしれない。

B地区では旧農道下に地形傾斜に沿った、1m~50cmほどの深さのV字状の溝跡が検出され、溝底から弥生時代後期の土器片が相当量出土している。水の流れた形跡は少なく、蛇行をしているが区域を画する溝のようである。上面で交差する溝・東側に別の溝が検出されているが、時期は不詳である。C地区では地形傾斜に沿わない南北の溝が検出されている。砂質土の堆積が多く、そのなかには縄文時代中期の土器片が多く含まれていた。溝そのものの遺物ではなく、上方からの流れ込みと思われる。

C地区の北側が洞沿いの低地に北面する傾斜地に中世・近世の陶器片が集中するところがある。グリット掘りでは地下からあまり出土しなかった。上方A地区から土を運び入れたとの話で、上方にこの期の包含層があったものと思われる。A地区のグリットで近世陶器が出土し、その土手下から中世常滑の陶器片が発見されている。⑪~⑭と⑯周辺に中・近世陶器が多く発見されていて、夫々関係があると思われる。北側の埋め土する辺りは「薬師前」と呼ばれるところで、中・近世陶器の出土と繋りがあるのかもしれない。

2 遺構と遺物

1) 縄文時代中期・後期

(1) 1号住居址 (D2地区)

① 遺構 (第5・6図、写図2・3・4)

D2地区・3266番地の梅畑道路沿いで検出した竪穴住居址である。道路沿いでは表土下20cmで遺物出土がみられ、縄文時代後期・中期の土器片が多量に出土した。住居址の床面は道路沿いで表上下60cm・北側で85cmのところにある。從って覆土を含めて浅いところで40cm・深いところで

60cmほどの間に土器が包含されていたことになる。床面に近いところで検出された土器もあるが、30cmほど高い位置で検出された完形・半完形の土器もある。それを図示したのが第5図で、最も集中していたところは炉の上である。最も高い位置にあったものはNo1（第8図1）の深鉢形土器である。住居址東外でも1個体の土器片が集中出土している。（12'）

住居址の主軸はNS18Wでプランは南北5.9m・東西5.3mで、梢円形である。壁面は北で30cm・南で20cmをはかり壁はやや傾斜をもっている。炉は9個の石による長方形の石囲い炉で、長径は主軸に沿っている。炉の深さは15cmと浅めで、焼土も5cm程度である。炉石は焼けが目立つがそのわりに焼土は少なく南側より少なめである。炉の拡張があったかに見られる。

主柱穴はP1～P4、P5～P8の8本で、夫々38・60・36・46cm、54・40・43・36cmの深さで、他のピットはP13・P14の39・51cmを除いては20cmとあまり深くない。炉の西側に直径7～8cmの小穴が幾つもあったがその用途は不詳である。周溝は南側を除いて、断続的に検出されている。所によつては2本あって、ピットの数・張り床の存在から拡張された住居址と思われる。

埋甕が2個あって、2個とも逆位のものである。1は主軸に沿った南南東壁際、2は53°東によつた壁際で検出されている。1は写図7・8にみられるように、70cmもある大形のものであった。埋甕1の回りはやや凹みが目立ち、張り床も何層かあった。

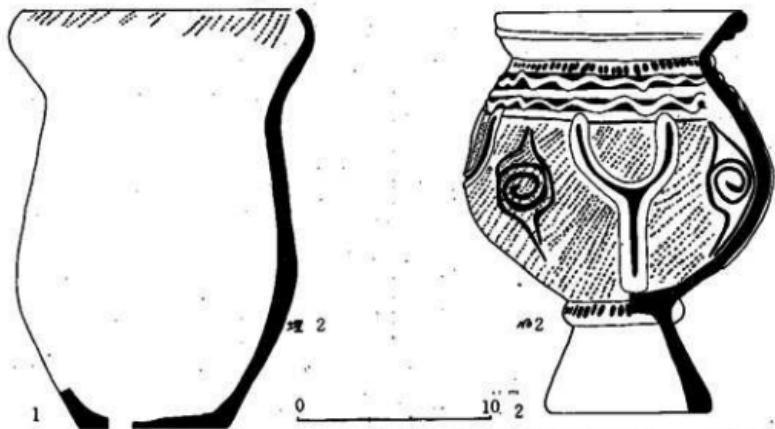
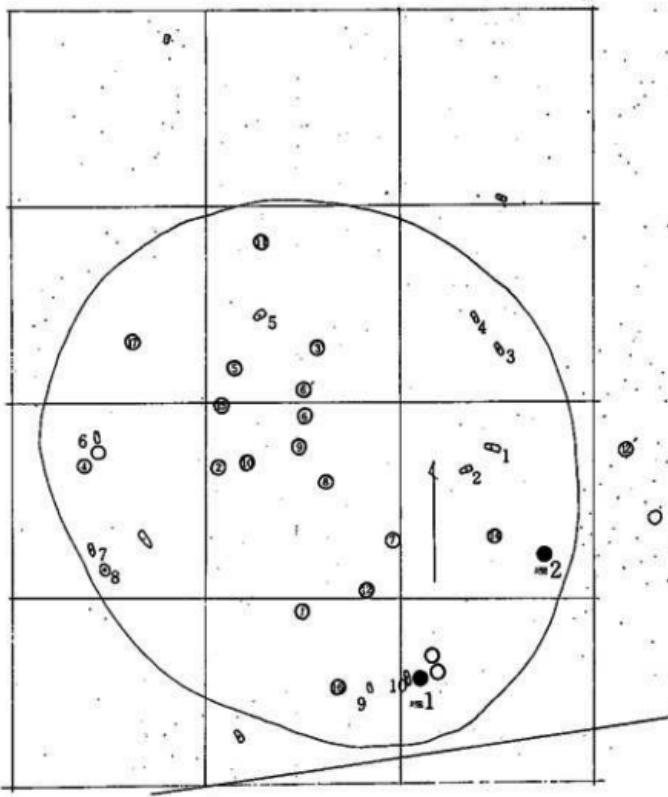
P2は2段になつていて、中腹に環状石が落ち込み、この上層に焼土をもつ黄褐色土が約30cmほど堆積していた。あるいは後の遺構の一部かもしれない。

② 遺物（第5・7・8・9・10・11・12・13・14図、写図4・5・6・7・8・9・10・11・12）

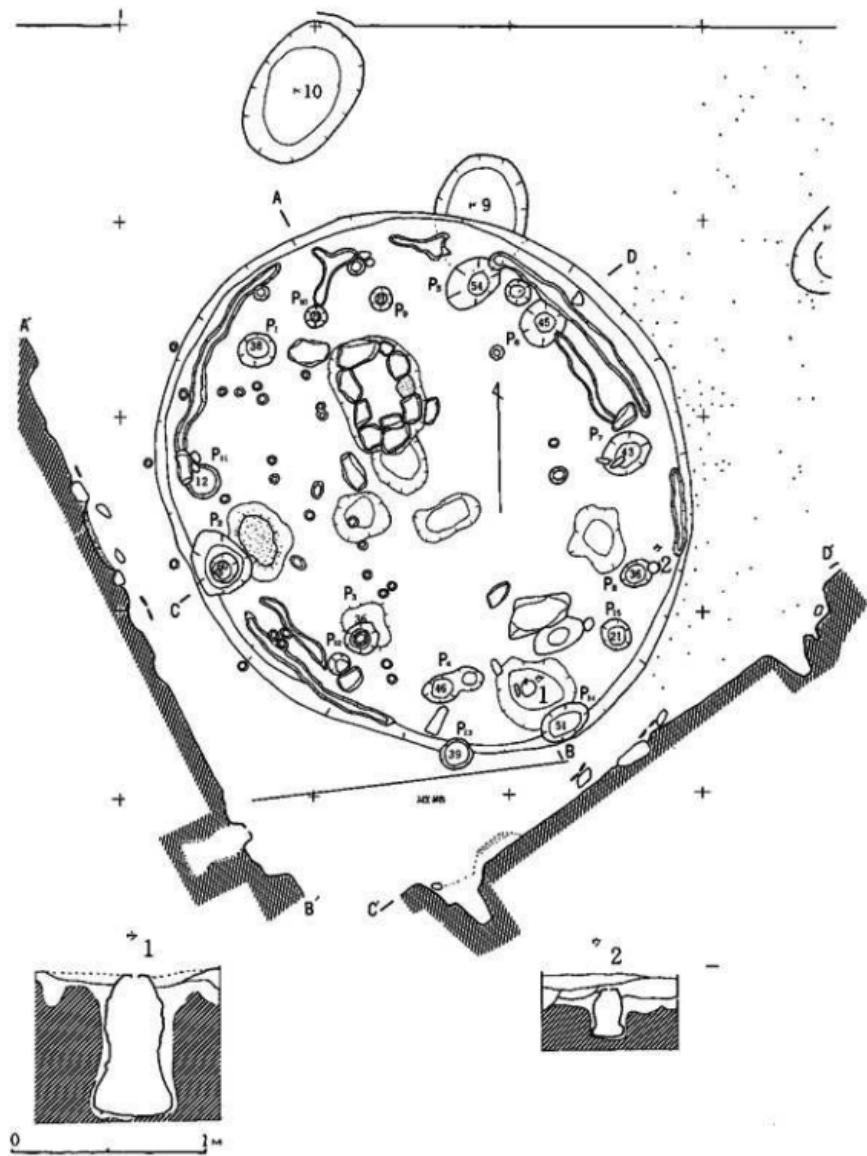
埋甕2のはかに、第5図1の台付甕形土器・第7図1の深鉢形土器・写図10・11の粘土紐張りつけの各種土器、縦帯と粘土紐の張りつけで構成された土器、縄文と沈線で構成された土器、縄文と竹管によって構成された土器、深めのカキ目文で構成された土器、無文で表面をナデ調整された鉢形土器等様々である。

第7図の土器は埋甕1である。器高は口縁の突起を含めて70cm、口縁30cm・口辺の最大幅で45cm、胴部の最小幅28cm、底部の直径は15cmを測り、現在のところ飯田・下伊那地区最大の埋甕である。口縁には6個のやや退化傾向の角状突起が付いていたもので、甕の取り上げ・運搬中に削り取られた様子である。口辺から胴底部にかけて隆起線文による渦巻き・垂線・蛇行線で構成され、その区画内を強めの条線文状の描線で埋めてある。器形はキャリバー形で内湾する口縁である。頸部は左右に小さな把手を付け、横の隆起線の中に交差と縦線による区画が作られ中央に縦の描線が施され、その上に大形の飾り把手が付けられている。このような飾り把手は4個付くが、大きいのは1個で他の3個は小さく形態が夫々同じではない。底部にかけても同様の施文ではあるが描線が主体になる。施文・器形から見ると讃岐地方の曾利I式に比定される土器である。

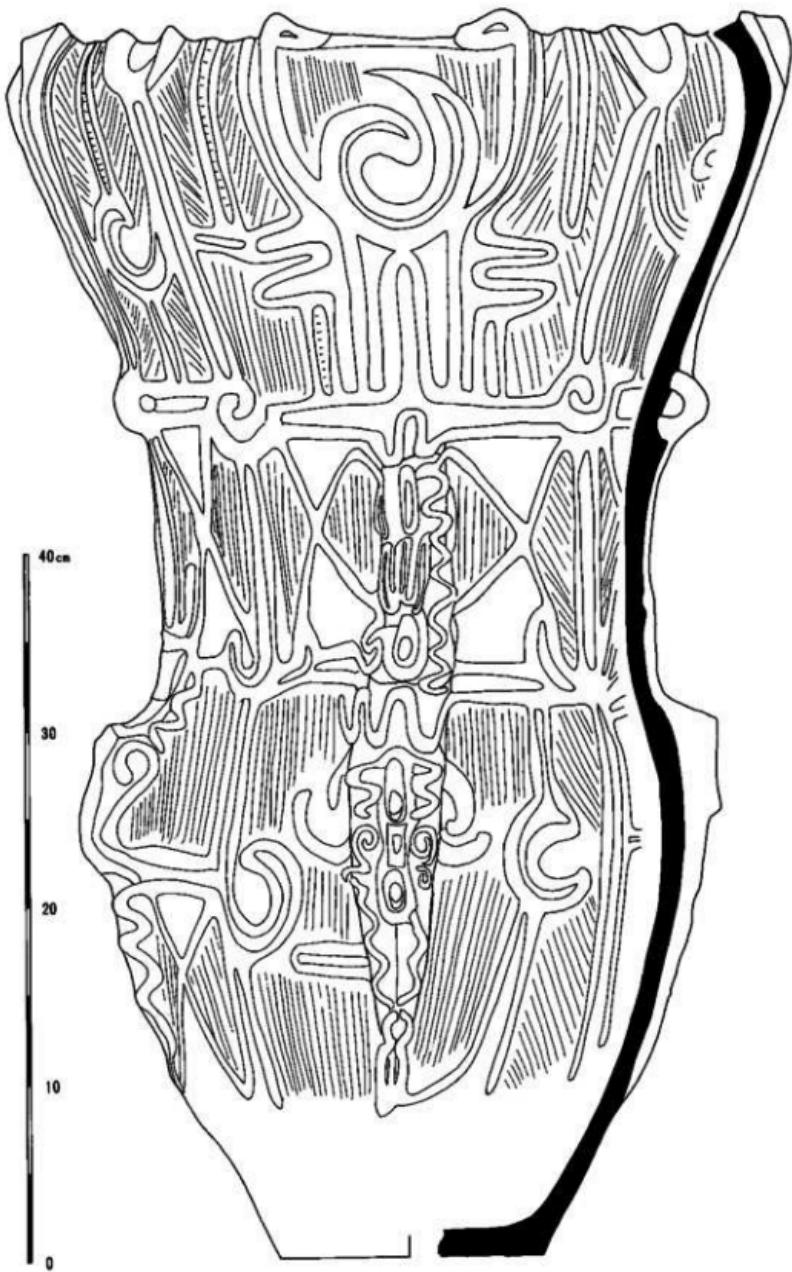
第5図1の土器は埋甕2である。南南東の壁沿いにあった逆位の埋甕で、底部穿孔されている。



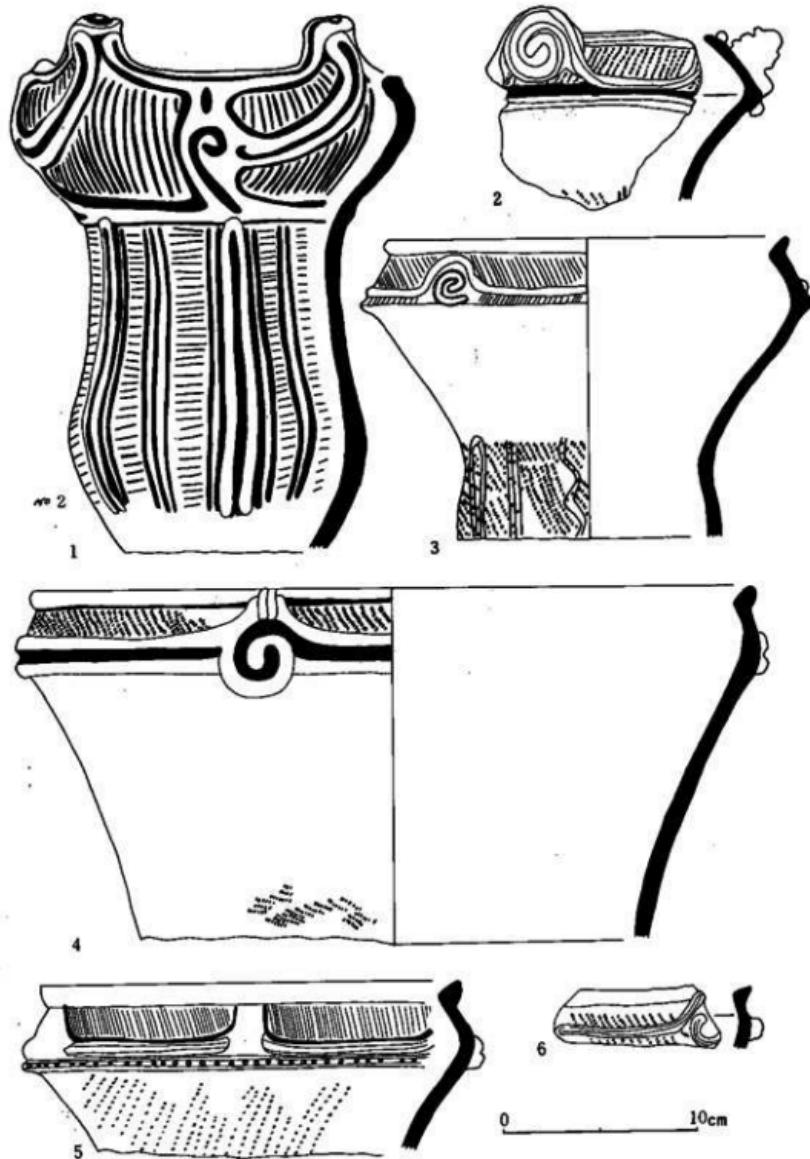
第5図 1号住居址完形土器出土位置(1:60)と出土土器(1:3)



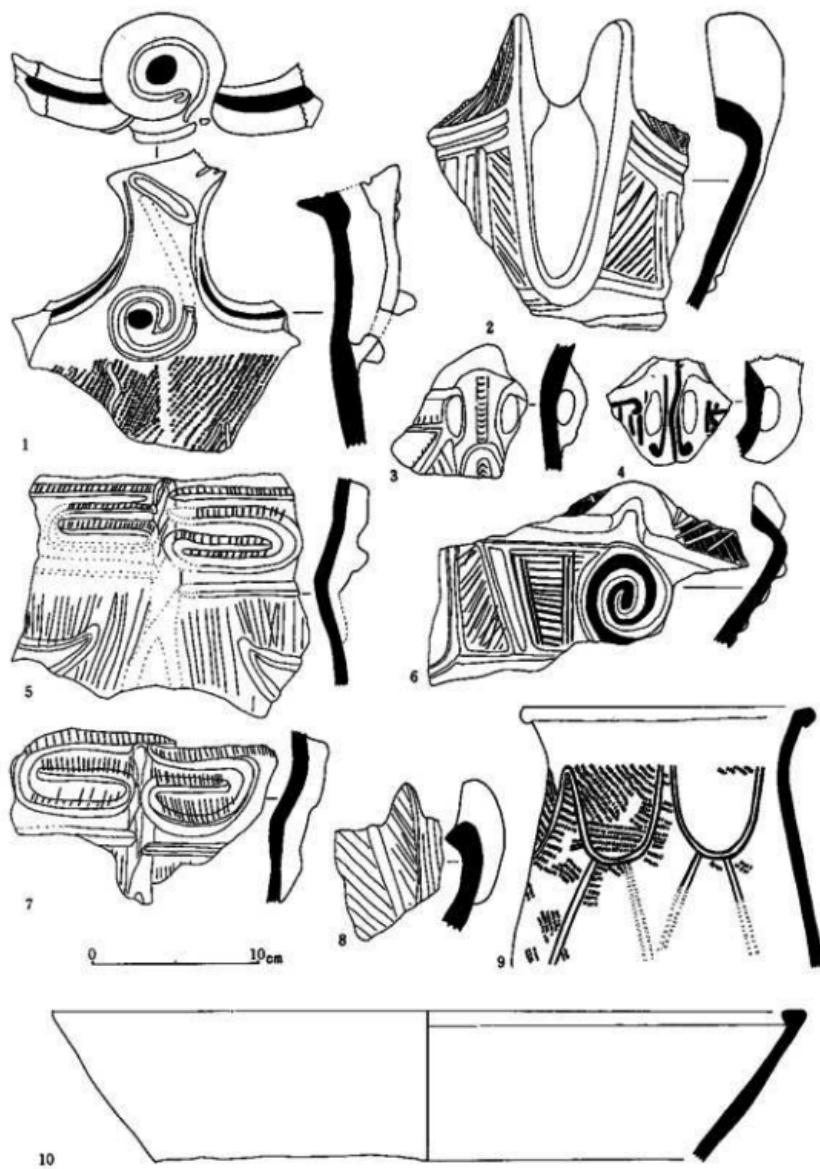
第6図 1号住居址 (1:60)・埋甃断面図 (1:30)



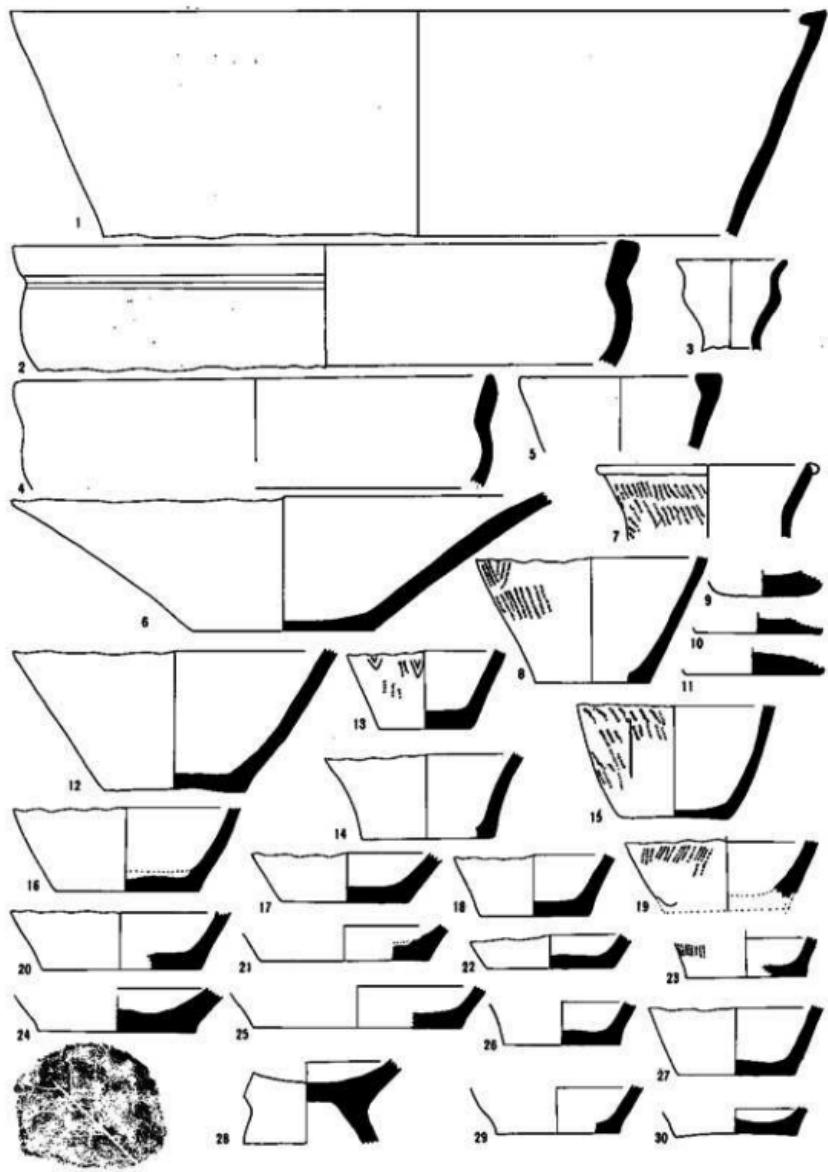
第7図 1号住居址埋壙(1)(1:3.3)



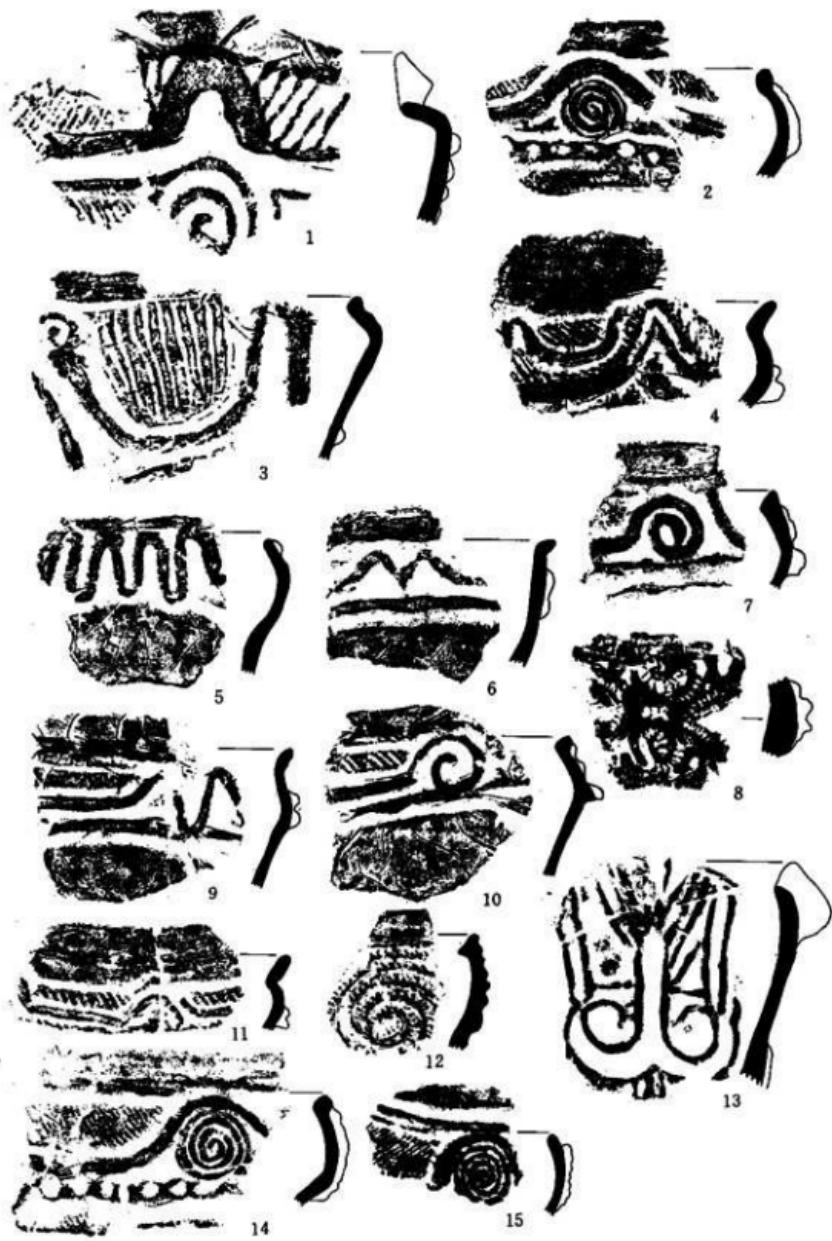
第8図 1号住居址出土土器(2) (1:3)



第9図 1号住居址出土土器(3)(1:3.5)

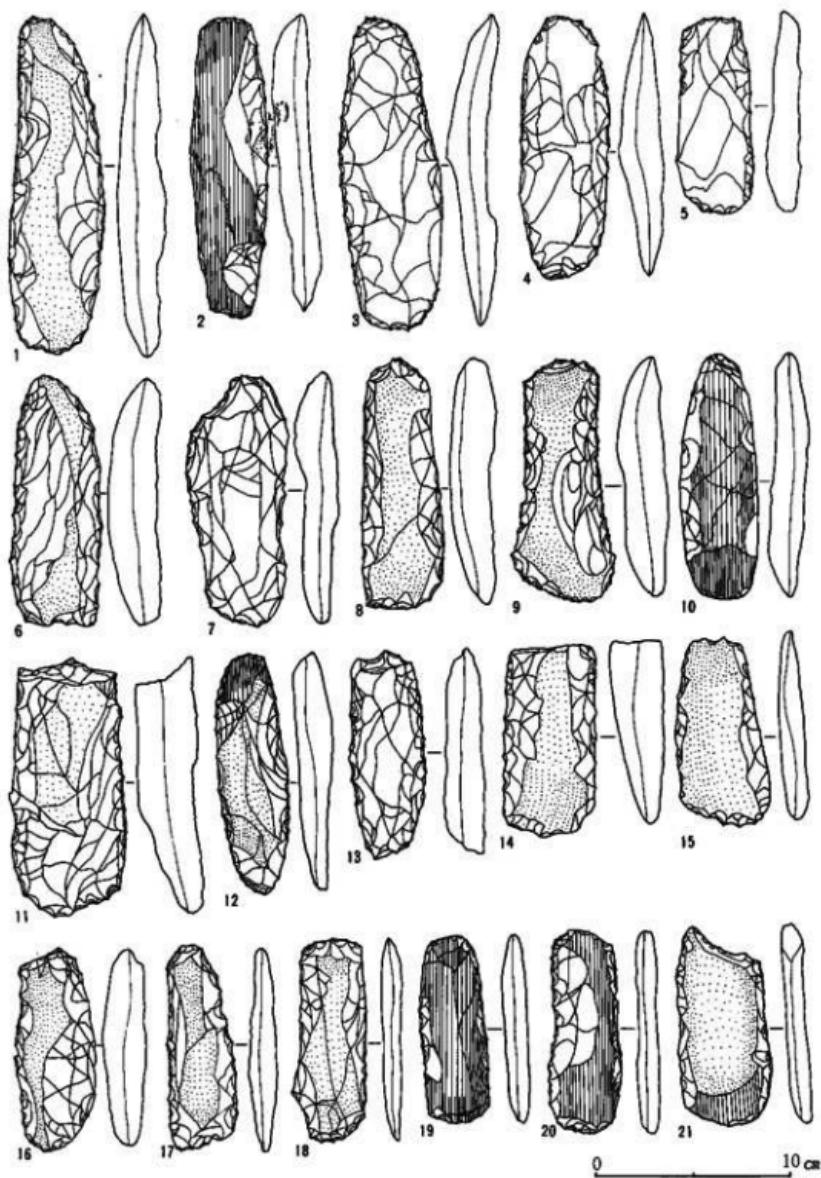


第10図 1号住居址出土土器(4) (1:3.5)

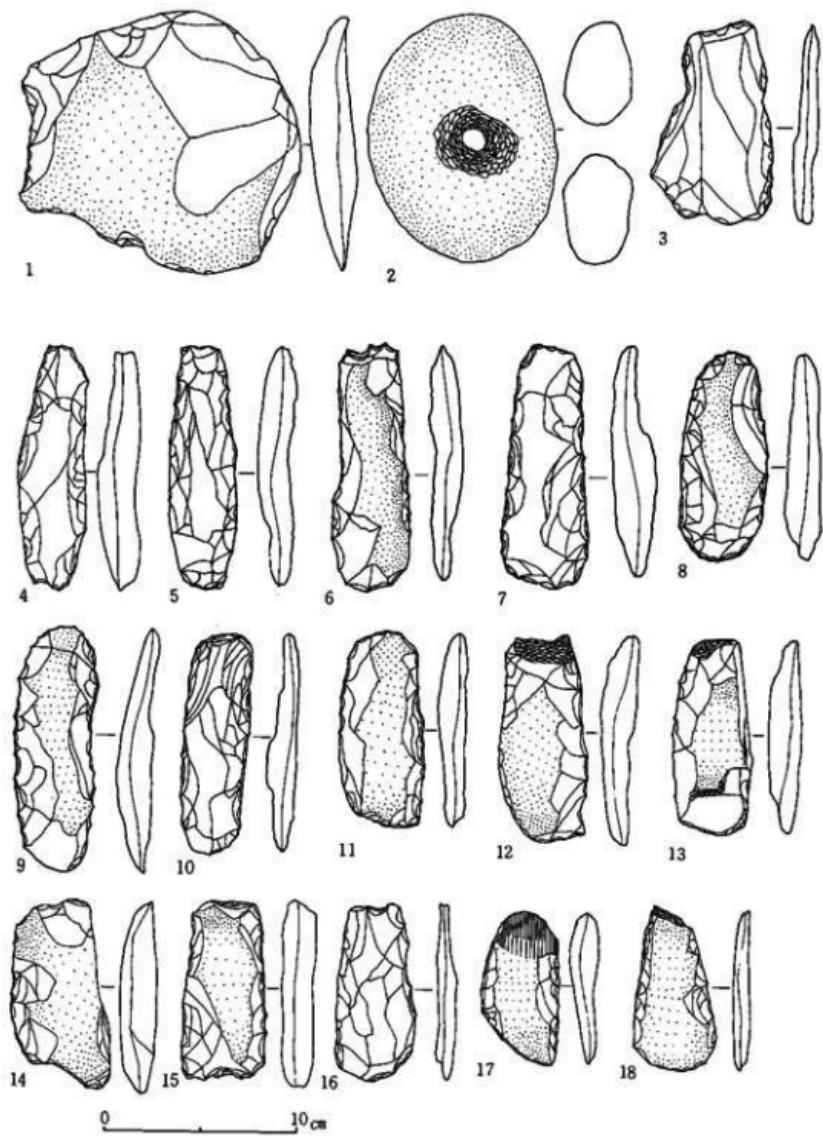




第12図 1号住居址出土土器(6) (1:3.5)



第13図 1号住居址出土石器 (1 : 3)



第14図 1号・3号住居址出土石器 (1:3)

(1号…1~3, 3号…4~18)

器高は21.5cm、口縁は14.5・底部7.5cmのキャリバー形の土器である。口辺に細めの斜走繩文が施されているほかは無文である。曾利Ⅱ式土器に比定される。2はNo2の土器で、台付壺形土器である。口径13cm・器高20.5・底部径8.5cm・台高5cmである。頸部と台接着部に刺突文が並び、肩部には2本の粘土紐を横走させその上に波状に粘土紐が付けられている。胴部は斜走繩文を地文とし沈線で渦巻文を施し、2本の変形Y字形の粘土紐が付けられている。第8図1は底部を欠く深鉢形土器である。器高は残されたところで26cmある。口縁を湾曲させて4個の対立した小形の把手を着け、隆起線文と描き線文の構成による土器である。描線は頭部は綫、胴部は平行横線で飾っている。器表はヘラ状工具による丁寧な調整が成され光沢のある土器である。描線の特徴は曾利Ⅰのようでもあるが、器形・文様から見ると2とともに曾利Ⅱに比定されよう。

第8・9・10・11図、写図10・11の土器は特徴的なものを並べたものである。口縁の中には渦巻文の着く把手をもつ二重口縁の土器・角形把手のものもあるが、多くは粘土紐で飾るものが目に付く。頸・胴部片には繩文と沈線による構成、繩文と竹管による構成、隆起線文と描線・描線だけのもの・刺突文と描線等のものがある。総体的に見れば、粘土紐によるもの・繩文と沈線の構成によるものが多い。

第12図・13図、写図12の上は石器である。短冊形打製石器・横刃形石器・鍤石・穿孔丸石・石錐等である。

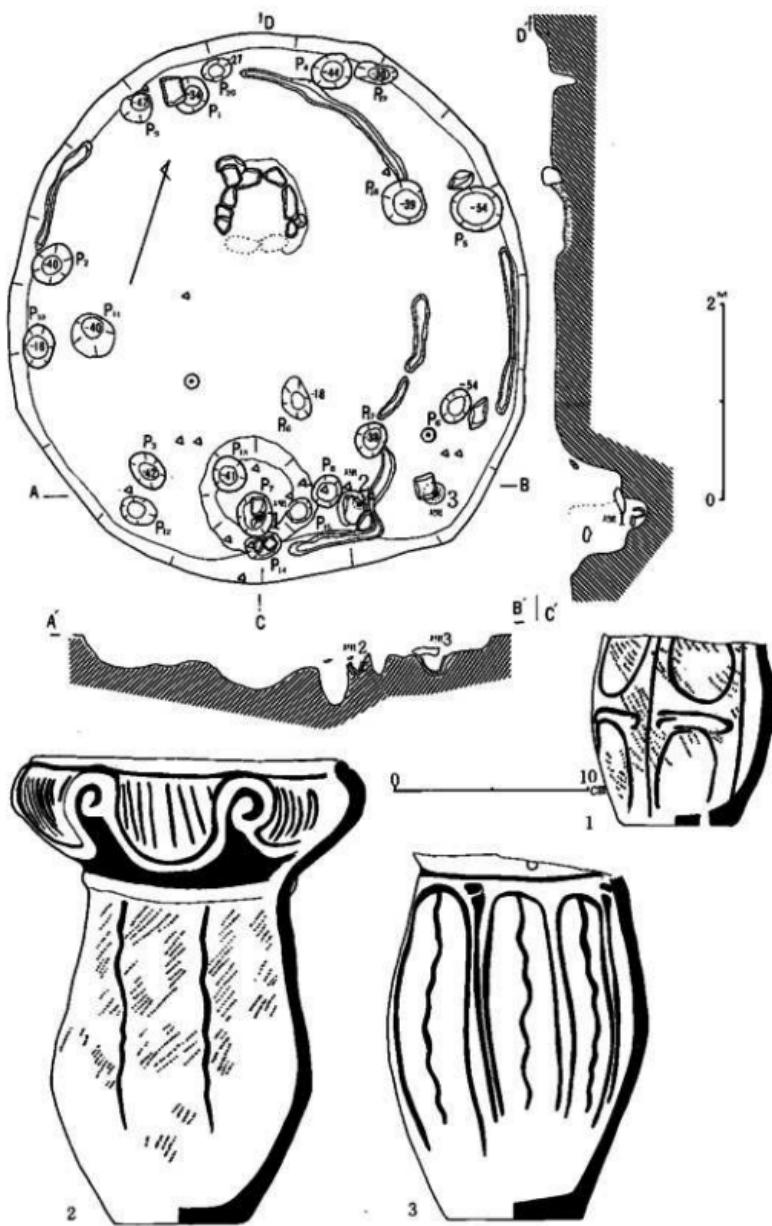
(2) 3号住居址 (D1地区)

① 道構 (第15図、写図13・14・15)

D地区3268番地の北側で検出された竪穴住居址である。表土下60cmほどのところで発見されたもので、主軸はS N 9 Eで南北5.6m・東西5.4mのはば円形のプランであるが、10角形状に壁は角張っている。重機による排土があったので少し削られているが、残された壁高は北で15cm・南では20~40cmと深めになっている。炉は北側壁から2m中に入ったところに構築された石団あ爐で、8個の石が残り南がわに2個の石があったと思われるが取り除かれていた。炉のなかは20cmほどの深度で、焼土の厚さは5cmくらいである。

ピットの数は多く20個が検出されている。主柱穴は、P1~P6とみられ、それぞれ34・40・42・44・54・54cmを測る。これとは別に深さ・位置からみて、P9・P11・P13・P17・P18も一つの別の組み合わせが見られ、後述の周溝・複数の埋甕等から東側に建て増しされたものと思われる。周溝は断続的であるが東側に2本西側に1本検出され、幅は15~20cm・深さは15cmほどである。

床は凹凸がみられ固く整ったところもあるが、場所によっては黒土混じりで判明し難いところもある。張り床のためであろう。◎印の位置に完形土器が潰れ込み、△印のところから石器が出土している。南側壁沿い一帯は、黒色土の混じりが多くみられ検出に手間取ったが、ピットと埋甕が入り組んでいたためである。●印1・2・3は大小の埋甕で、直列的に3個並んで検出され



第15図 3号住居址(1:60)と出土土器(1:3)

ている。1はP7のなかに落ち込んだ石の下に埋められたもので、床面からの深さは45cmであった。2・3は石蓋が被されみな正位の埋甕である。3の石蓋は石皿であった。

② 遺物（第14・15図、写図15・16・12）

第15図1は埋甕1で口縁から頸部を意識的に削り取ったもので、残った器高9.7cm・底部径5.8cmの小形の壺形土器で、底部穿孔されている。胴部から底部にかけて細い斜走繩文を地文として、沈線による区画が付けられている。繩文は磨消繩文である。2・3は○印から出土した土器で、2は口径15.5・器高24cm・底部径6.5cmのもので、キャリバー形の深鉢形土器である。3は口縁・頸部を欠いた深鉢形土器で、沈線による逆U字の区画のなかに懸垂文が施されたものである。滋賀地方の土器形式曾利Ⅲに比定されるものである。写図16の下は埋甕3でこれも口縁・頸部が欠けている。胴部に細い斜走繩文を地文として、沈線の縦線と懸垂文が付けられている。埋甕3も土器の破壊が進み復元されていない。

写図12の下左が出土石器の主なもので、短冊形・横刃形打石斧・鎌石・磨石等である。石器は南側壁沿いに多く出土していた。図示していないが石皿も1個出土している。

（3） 繩文時代後期土器集中地

① 遺構（第16図）

D2地区A～Hにかけての一帯に繩文時代中期・後期の土器片が多く出土している。1号住居址の上層にはとくに多く、東へ来るにしたがって少ない。出土層は表土下30～40cmの黒土・その下層の黒褐色土層中に出土している。G6グリットに入頭大の石が2個並びその周辺に僅かに焼土が見られ、その北に土坑4と土坑粉いの浅い穴があつただけである。

② 遺物

繩文を地文にした沈線で文様構成した土器片・緑色片岩の短冊形石器が出土している。

（4） D2地区土坑群

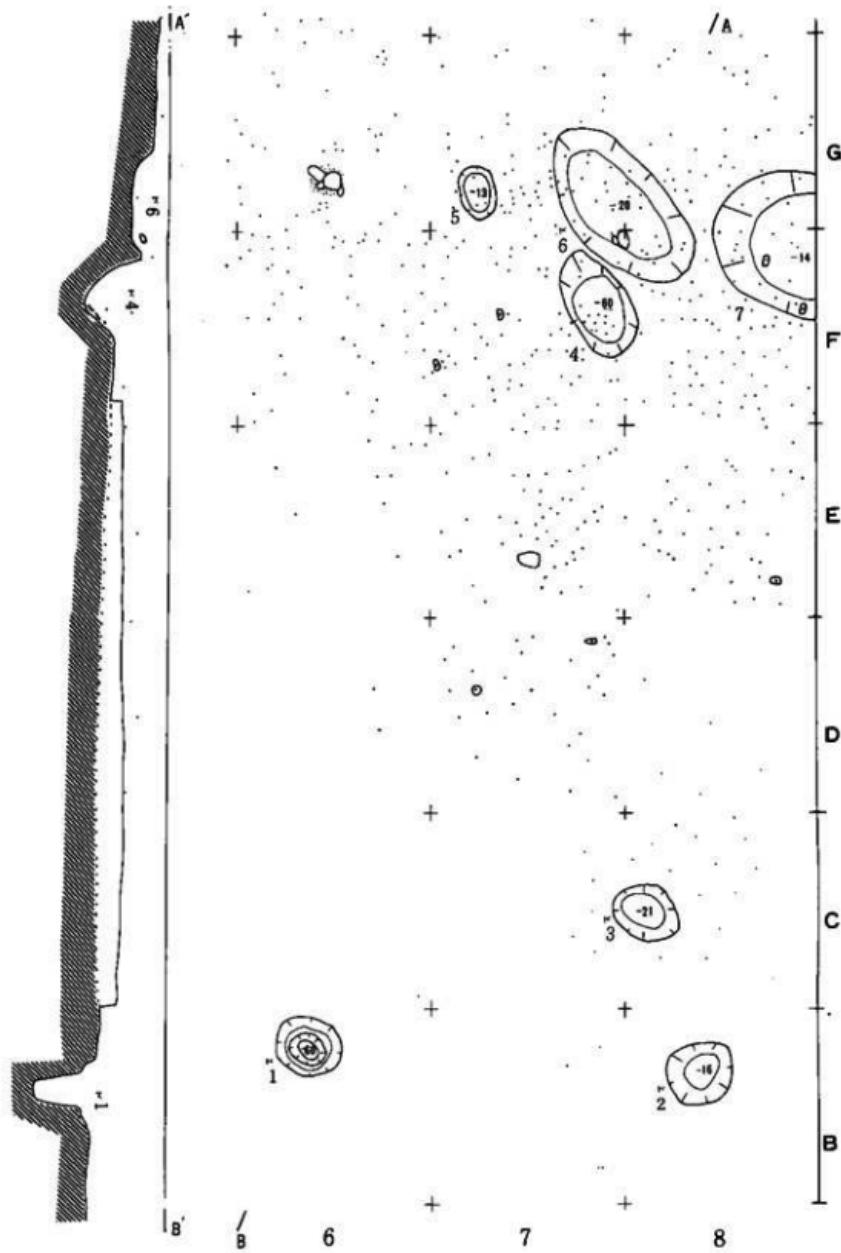
遺構と遺物（第6・16図）

D2地区B～1号住居址の北側にかけて10基の土坑が検出されている。1と4が深く60cmを測るが、他のものは20～30cm程度の深さではっきりしない。遺物は土坑4の中腹・孔底から繩文時代後期の土器片10程で出土したが、他の土坑からは2～3片の土器片が出ただけである。

（5） D1地区土坑群

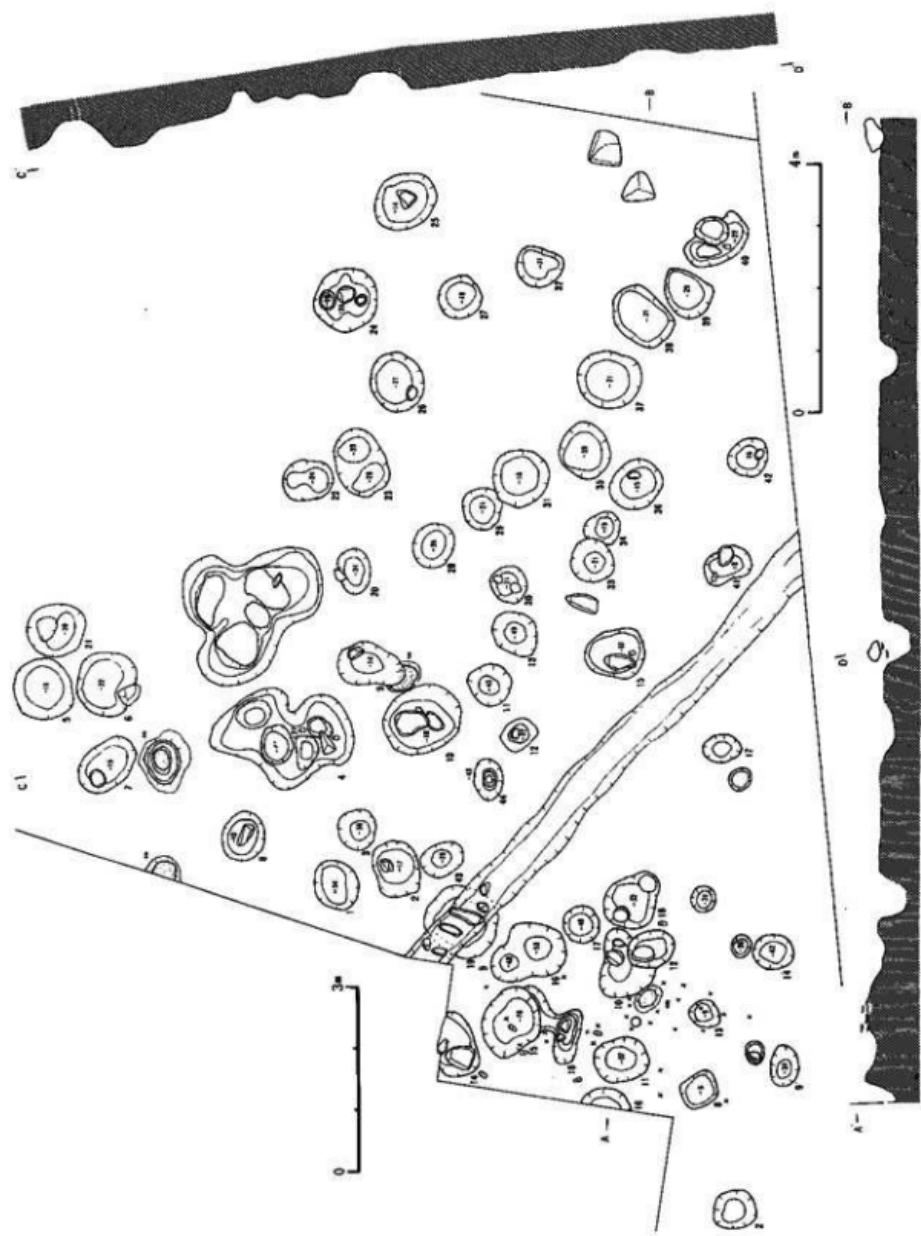
遺構と遺物（第17図、写図17・18）

D1地区AからD2地区の西側にかけて集中して検出された土坑群である。西北から南東にか



第16図 D2地区土器集中地と土坑群 (1:60)

第17図 D1地区土壤群



けて走る溝状造構を挟んで、西側に13基・北東側に42基の土坑と2基のロームマウンドが集中している。大小様々で深さも浅いものが多い。重機による排土作業のため上部が削られ、平状の石が2~3個とばされているので実際はもう少し深かったと思われる。

黒褐色土中に焼土が検出された焼土1、土層の高さは黒褐色であるが黄褐色土盛りの上に焼土のあつた焼土2・3、黄褐色土面に焼土をもち土器片が集中する焼土4がある。土坑と関係するかどうか分からぬが、土器片はこの焼土の面で多く出土している。平状の石が配されている土坑は、北から7・8・4・9・2・12・10・15・41・40・24・25・26等で、土器片が割合多く出土したり石器が出土している土坑は、4・15・16・40と西側の14・15・12である。

土坑15を例にしてみると、写図18の左のように黒色土の上に石が置かれ（重機で取られている）縄文時代後期の土器口縁があったもので、緑色片岩の石器も出土している。深さも62cmあって筒形の整った土坑である。土坑4は全体は27cmほどの凹みがあって、そのなかに4個のピットが穿たれ深いのは47cmある。縄文時代中期の土器片が多く石器も出土している。西側の10~18、その東の16~18は狭いところに10基以上の土坑が密接し、焼土4を中心にして縄文時代中期の土器片が集中し、石器出土も多い。

ロームマウンドは2基あるが、1は黄褐色土の土盛りのうえが焼けていたもの、2は約2m程の範囲に高さ10cmの黄褐色土の土盛りがあった。回りには黒褐色の落ち込みがみられ、土器の出土はない。土坑の掘り下げ土が堆積したものかもしれない。これと同じ様な土盛りが3号住居址の南西壁際にもあった。

一つ一つの土坑についての検討はしていないが50数基に及ぶ土坑群の方向は、北北東から南南東に配列されている。それぞれの時期は同一ではなく、縄文時代中期・後期のものが重複していると思われるが、夫々の時期は不詳のものが多い。D2地区の土坑群を含めて集落との関係は釐めていないが、集落の主体は南にあるものと思われる。

(6) C地区土坑群

遺構と遺物（第21図、写図19・22・24）

第4図遺構配置図にあるC地区D3の位置にある。道路予定地だけの調査であったが、2.5×8m程の範囲で7基の土坑が検出されている。

中心的な土坑は4で、南北1.7m・東西2mの大きい土坑で深さは67cmあって、掘り方は円筒形の整ったものである。土坑というよりも竪穴と呼ぶに相応しいほどである。表土下20cmほどで円形の輪郭が認められ、20cmほど下から縄文時代中期後葉の土器片が多く出土し始めた。坑底に近づくにつれて土器片は大きくなり、1個体の土器が投げ込まれたように散乱し、打製石器も7本ほど出土している。中間に人頭大以下の石も重なり、炭化物が混入している。坑底からは打製石器のほかに、下部の欠けた石棒が横倒して検出されている。石棒の長さは35cm・最大12cmの太さで頭部は奇麗に磨き上げたものである。周囲にピット5個が検出されているが、位置的には土

坑4に属するようにみられるが確たることは言えない。

土坑6は長径68・短径62cmの楕円形のもので、深さは16cmほどで上面に拳大の石が置かれている。その北にある土坑2の深さは10cm程度で、拳大以下の石が平坦に並べられている。集石遺構にピットが付属する状態である。土坑1・5・7は浅い凹み程度のもので、周辺には縄文時代中期の土器片は出土しているが、これらの土坑のものかどうか分からぬ。

調査範囲の西南隅に溝の一部が検出されている。南のグリットで検出された溝状遺構3の一部であろう。この溝状遺構3からは、縄文時代中期の摩滅した土器片・石器が多く出土している。溝の覆土は、黄白色砂質土で水の流れた形跡があって、上方から流入した遺物とみられる。

これらの周辺の遺物散布の状況は、西上方の畠には石皿のほか縄文時代の土器片少量発見されたが、遺物表採の多いところは東側中央自動車道に懸けた一帯である。平畠遺跡の東の中心がここから下方と考えられる。

(7) その他の縄文時代の遺物（写図24）

グリットで掘り上げられた土器の大部分は縄文時代中期・後期のもので石器も相当量出土している。

2) 弥生時代後期

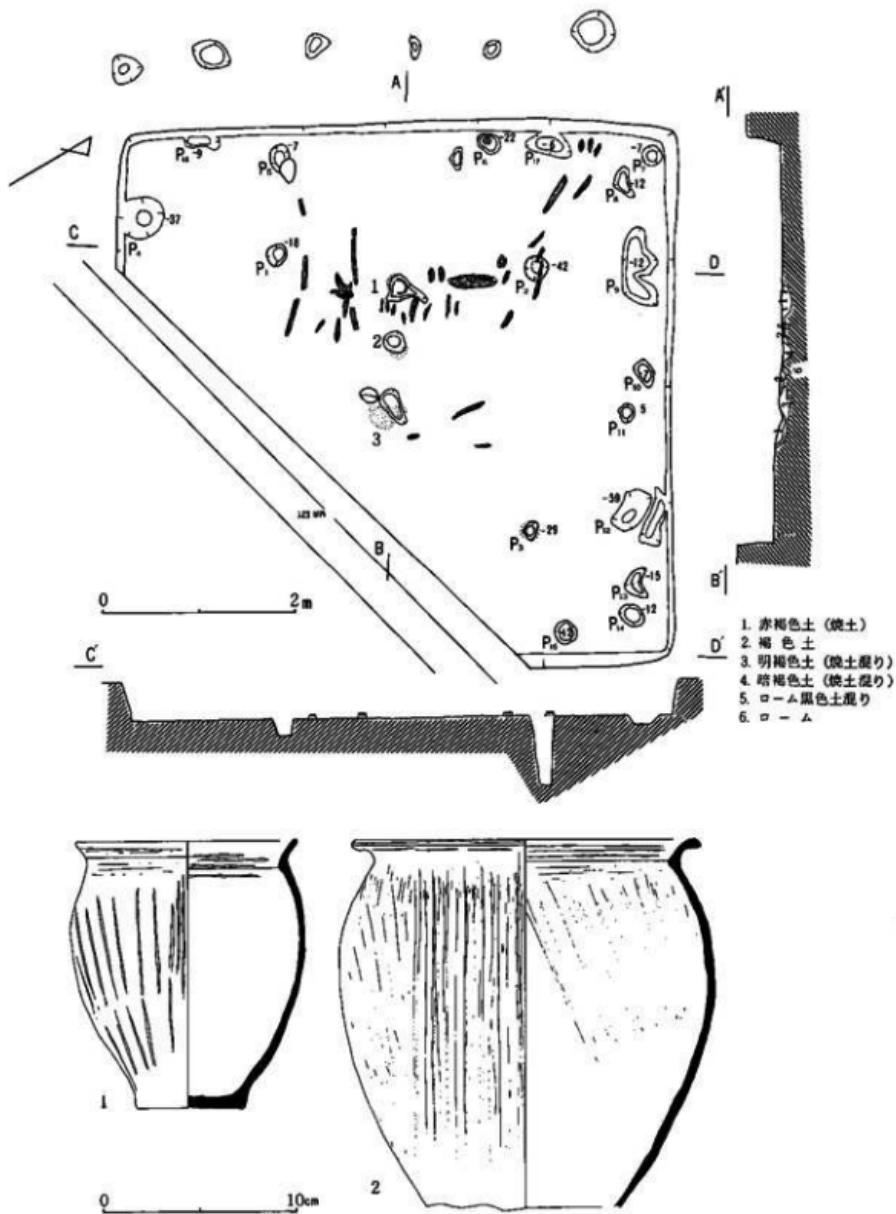
(1) 2号住居址（D2地区）

① 遺構（第18図、写図20）

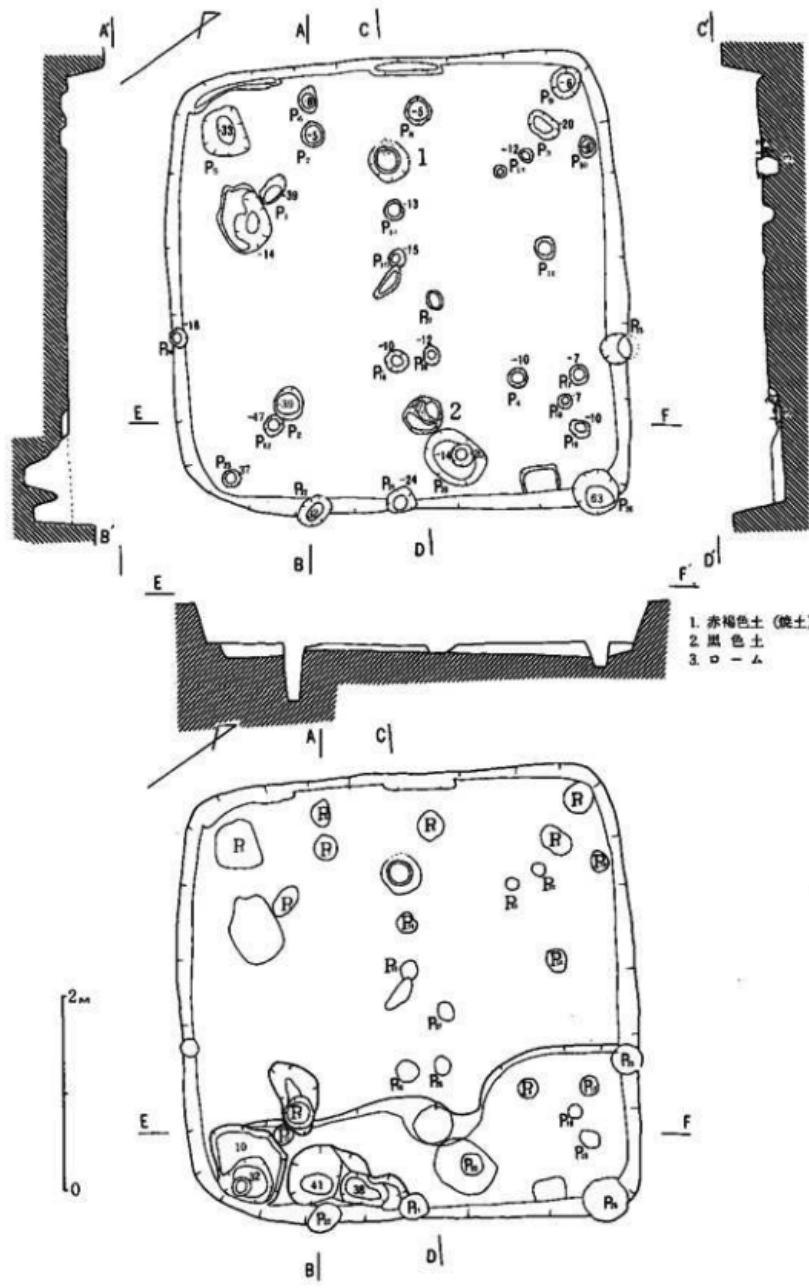
1号住居址の10m西側にあって、南側の道路に懸かって検出された竪穴住居址である。この住居址は上郷町遺跡図によると、八幡原遺跡と平畠遺跡の接点にあたるところであるが、今回は平畠遺跡と扱っている。

南北東3分の1が道路に隠れていて検出されていないが、プランは南北5.8m・東西5.6m、この期のものとしては大振りな竪穴住居址で、主軸はS N50Wである。壁高は40cmほどで、竪穴の掘り込みはやや緩やかである。覆土は上部では茶褐色砂質土・中下層では黒褐色土である。これはこの住居が火災に遭い炭化材と炭が多かったためである。炭化材は中央から西壁沿いに多く梁材・屋根材の一部もあるとみられる。

炉は主軸線にそって新旧3個が検出され、北から1は埋甕炉、2・3は地床炉である。床は固い叩きであるが、所によっては黒色土の張り床状で軟弱の部分もある。特に北側壁沿いはその形状が著しく、その黒色土を剥がすとピット状の穴があり深いものは52cmもある。主柱穴はP1～P3とみられるが、P2が最も深く42cmあるが、P2は18cmしかなく主柱穴かどうか疑わしいが位置は良い。間仕切りのピットは見付かっていない。



第18図 2号住居址(1:60)と出土土器(1:3) 1…2住, 2…4住



第19図 4号住居址 (1 : 60)

住居内と西側住居外にピットが数多く並ぶ。その間隔・配列は整い、とくに西壁外のピット列は、この西側には相対のものがないのでこの住居のものとみるのが妥当と思われる。

② 遺物（写図22）

写図22の上左が主な出土土器である。左上から口径11.2・器高17・底径5.2cmの小形壺形土器、埋壺炉の壺形土器・高杯形土器の杯・壺形土器壺形土器の底部・朱彩土器片・打製石包丁形石器等である。土器には施文はなく棒状工具による成形痕があるだけのもので、口縁の折れ曲がり外反が緩やかなものが多い。土器形式から弥生時代後期中島式の末葉に比定されるものである。

(2) 4号住居址（D1地区）

① 遺構（第19図、写図21）

D2地区新設道路予定地内（№0-1～№0-2）とその東側にかけて検出された弥生時代後期の堅穴住居址である。表土下70cmほどの深さで覆土が確認されたもので、主軸はS N59Wで、プランは北西方向で4.6m・南東方向で4.7mのはば正方形に近い隅丸方形である。重機で排土しているので覆土の一部が削られているが、残ったところで40cmほどあるから、掘り込みは深く壁の掘り方も傾斜も少ない整った住居址である。床は固い叩きで総体的には平坦であるが、所どころに黒色土の落ち込みが見られ張り床が検出されている。ピットの数は非常に多く27個を数えるが、大きさ・深さ・位置からみても選びにくいが、一つの組はP1・P2・P3・P4で、ほかにも候補は幾つかあるが、壁沿いに幾つかのピットが並ぶ。間仕切りのピットはP14～P16であろう。炉は北と南に検出されともに埋壺炉で、1が新しいとみられ、写図21のように底部を欠くが完形に近い壺形土器が使われている。2は壊れて4分の1ほどしかない。

南東の壁際はとくに黒褐色土が入り混じり、張り床の下から縄文時代中期中葉の土器片が出土した。この下に深めの土坑が2基検出されている。

② 遺物（写図22）

写図22の上右が4号住居址出土の遺物である。左上から埋壺炉の壺形土器で底部を欠くが、口径17.3cm・器高は残った部分で19cmある。施文はなくヘラ状工具による成形痕が奇麗に残っている。右側は壺形土器の口縁部で、L字形口縁がやや退化ぎみである。壺形土器の口縁・壺形土器の胴部・底部・台付土器の台で、この台の回りの土器片は描線の付いた欠山式土器片のグループである。

石器は打製石包丁2・半欠けの有孔磨製石包丁形石器である。無文の壺形土器・口縁の形態・欠山式土器の混入等からみて、弥生時代後期末葉に比定される住居址である。2号住居址と同時期のものかと思われるが、集落関係は分からぬ。

(3) 弥生時代溝址 A・B とその他の溝状遺構

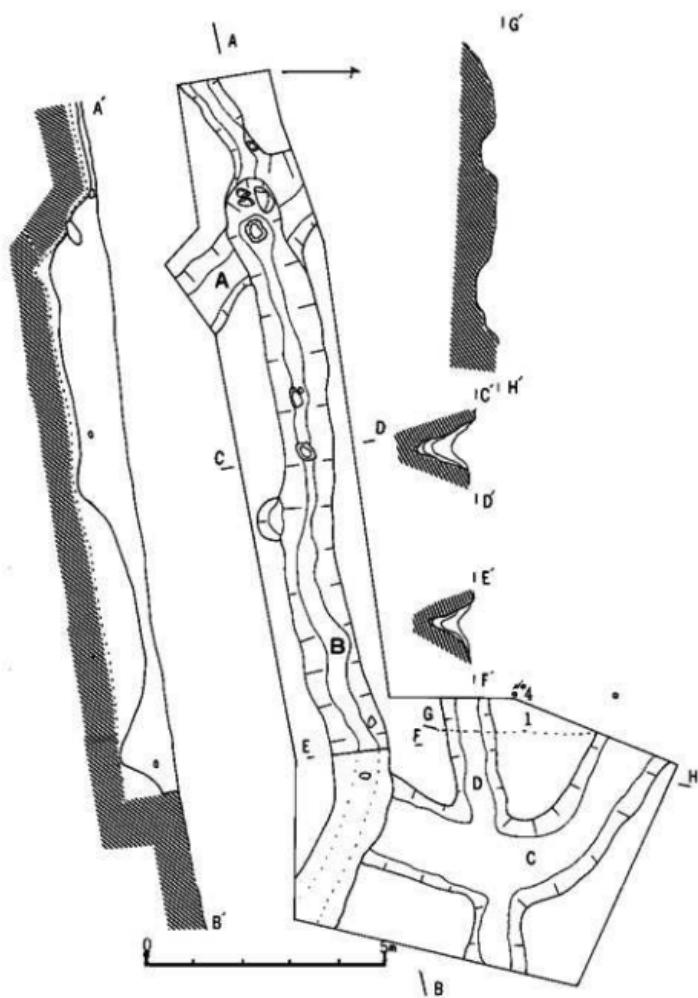
遺構・遺物（第20図、写図23）

B地区とC地区で検出された溝址と溝状遺構である。B地区旧農道沿いを東に走る溝址Bと、上方で交差するように南東へ向かう溝址Aで、表土下30cmほどのところから1m50cmくらいの深さのV字状の溝址がBである。上方は細く浅いが、溝址Aと交差するところで急激に落ち込みV字状の深い溝で東へ続く。覆土は茶褐色土・黒褐色土が厚く、溝底にわずかに黄白色砂質土が堆積するだけで水の流れは少ないと思われる。中・下層から弥生時代後期の土器片が検出され、他の時期の遺物は見当たらないので弥生時代の溝址と考えられる。

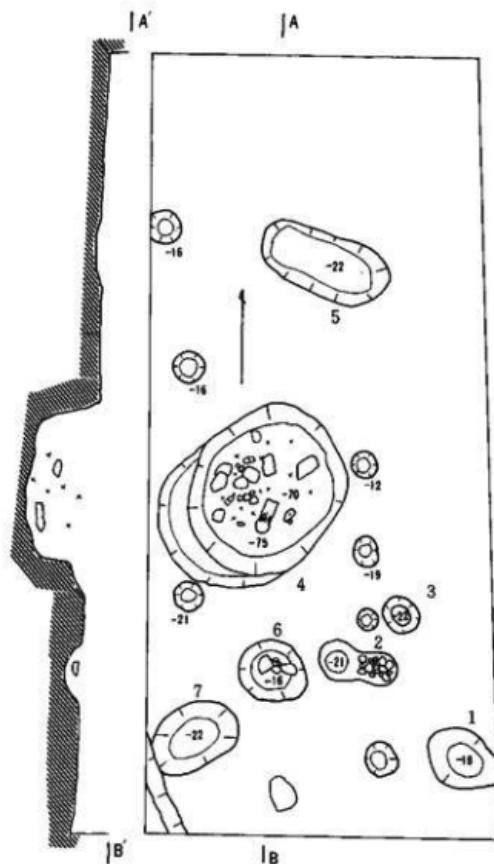
北側に溝状遺構C・Dが交差するように構築されている。表面と覆土中ほどに弥生時代後期の土器片が少量出土している。溝址Bとの交差関係は用地の事情で留めていない。

3) 古墳・平安時代・中近世の遺物

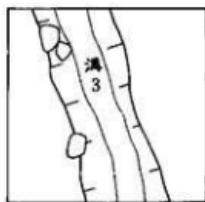
第4図遺構配置図にあるように、各地から古墳時代高杯形土器片・平安時代灰釉陶器片・中世山茶碗片・常滑陶器片・瀬戸灰釉陶器片・天目茶碗片・近世陶器片等が相当量出土している。



第20図 B地区測址A・B, 清状遺構C・D・E・F・G・H



0 2 m



第21図 C地区土坑群と溝状遺構 3 (1:60)

IV 調査のまとめ

1 検出された遺跡・遺物の概要

今回の発掘調査地は、上黒田・黒田中部地籍局状地の東北東にある平畠遺跡が大部分で、西に広がる八幡原遺跡の一部が含まれている。発掘調査の結果、上郷町埋蔵文化財包蔵地所在地地図に掲載される「平畠遺跡」の範囲は東へさらに広がることが確認された。道路予定地を主にして発掘調査が成されているため確証を得るまでは至っていないが、平畠遺跡の濃厚遺物出土地は西上方と東側下方に二分されると思われる。

調査対象地の事情によって検出された遺構の多くは上方に位置する。縄文時代中期住居址は2軒・縄文時代後期土器集中地1・縄文時代中・後期土坑約65・ロームマウンド2・弥生時代後期住居址2軒が上方地域で検出され、下方地域では縄文時代中期土坑7・弥生時代後期溝址2・時期不詳の溝状遺構4・近世建物址の一部が検出されている。検出された遺構は一部の地域に偏っているが、表面採集調査によればほぼ全域にわたって遺物採集することが出来る。しかし、細かく検討すれば遺跡の中心部分がいくつかに別れ、西北上方地域は地形的にみても、遺構の立地からみても八幡原遺跡の一部とみたほうが妥当かと思われる。

2 縄文時代1・3号住居址の特長

平畠遺跡の西上方でそれぞれ孤立した位置で検出されている。限られた調査地域ではあったが同一集落の一部でもと検出に心掛けたが、土坑群のはかは検出されなかった。西に続く八幡原遺跡に集落の中心があるとみられる。南西側に拡幅改良された町道建設時（1年前）に調査無しで工事が行なわれたことは今にして思うと口惜しいことである。

1・3号住居址はともに普通みられる標準的な住居址ではあるが、複数の埋甕をもつこと、住居の拡幅が行なわれていること、1号住居址は特に完形遺物が多かったことから長期に亘る生活が予想されるので、単独に1軒だけとは考えられない様相が多い。1号住居址の埋甕は二つとも逆位の埋甕で、一つは曾利Ⅰ式に比定される70cmもある下伊那最大のものである。もう一つの埋甕は曾利Ⅱとみられ時期差の見られるのも特長の一つである。3号住居址の埋甕は3個あって、みな口頸部を欠きとったものでピット内45cmの深さから出土している例は少ない。埋甕かどうかの疑問がないわけではないが、底部穿孔がみられるので埋甕と扱っている。埋甕の出土例は各地多いが、今迄上郷町では意外に少なかった。本年度の発掘調査によって下黒田増田遺跡からは20個近い埋甕が検出され、本町における埋甕の形態分類も可能になりつつある。

3 弥生時代後期住居址の特長

1・3号住居址と同様西側八幡原遺跡に接する地域で検出されたもので、上方の2号住居址は一部八幡原遺跡に含まれそうな位置にある。この二つの住居址も、別々の位置で単独で検出されたもので、時期的には似通っているが同一集落のものとは思えない。近くに別の住居址の存在を予想して検出を試みたが、確認するまでに至っていない。北上方薬師前遺跡に近い傾斜地から宅地造成中に弥生時代後期の土器が出土し、住居址の存在が認められている。地形条件は余り良くないが、上段地域によくある南面傾斜の小台地に形成されるこの期の小集落の例からみれば、南面する日雇り地に小集落があるかもしれない。耕作地権者の話によると黒色砂質土が2m程深いところがあるというので、埋没の可能性は高いように思う。

2・4号住居址ともに複数の埋甕炉が検出されたことも注意が必要である。下段地域にはよくその例があり、上段地域でも立地条件に恵まれたところにその例が多いことから、単独2軒だけの生活址ではなかろうかと思われる。西南八幡原遺跡に掛けた一帯か、平畠遺跡の東南下方地域を中心があるとも考えられる。本年度の発掘調査で、弥生時代後期の一大墓域群が検出されているミカド・ツルサシ・垣外遺跡が下方地域にあり、その中間には以前に弥生時代後期の完形土器が発見されている赤坂・五本木遺跡に続くところであるから、大きな集落発見の可能性は高いと思われる。

4 八幡原遺跡と平畠遺跡の位置付け

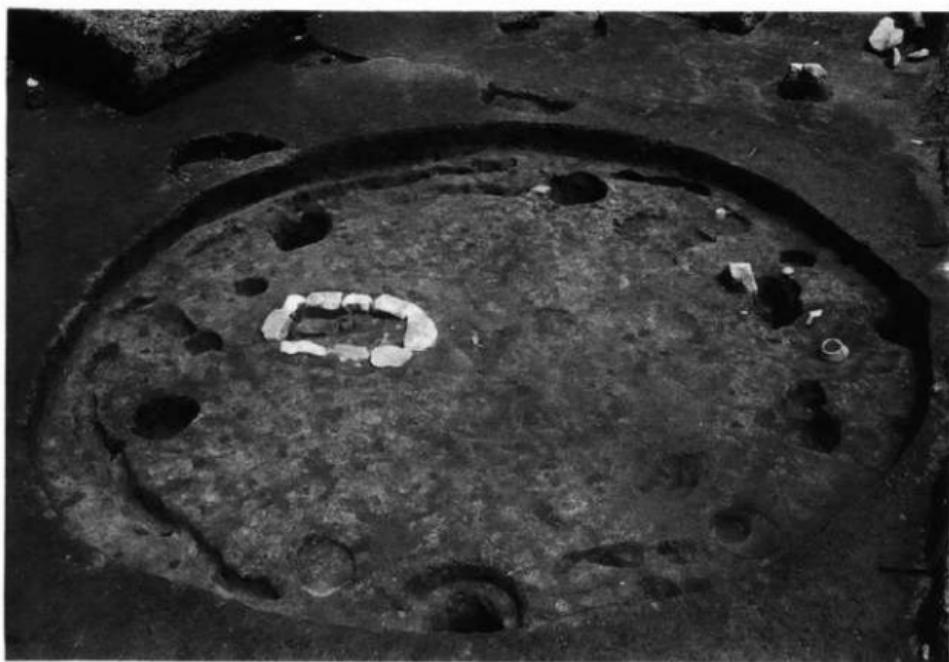
さきに縄文時代・弥生時代の住居址の項で触れたように、平畠遺跡の西北上方は地形的にみても八幡原遺跡の一部であり、今回の発掘調査の結果からみた遺構の配置状況からも言えることである。八幡原遺跡の南限を標高580m辺りと推定してあるように、その延長の平畠遺跡の南北上方は八幡原遺跡であってもよいと思われる。この不自然な遺跡範囲の決め方になる原因の一つには、昭和42年に実施された中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査にある。現在の中央自動車道を挟んで、西北上方が平畠遺跡・南東下方が五本木遺跡で登録され、中央自動車道用地内だけが遺跡範囲から外れる形になっている。分布調査当時は両遺跡とも中央道用地から少しずつ離れていたものが、飯田高校郷土班による遺跡分布調査・上郷町内遺跡詳細分布調査の結果両遺跡とも範囲が広がって現在の結果になったものであろう。

このような経緯が有ったために、上郷町中央道用地内では赤坂遺跡のほんの一部だけ発掘調査が行なわれ、平畠・五本木遺跡に掛かるであろう所の調査が全く行なわれていない。今にしてみると、上郷町内では中央道用地内に相当広い範囲で遺跡が存在していたにもかかわらず未調査に終ったことは口惜しいことであった。

写図1 八幡原・平畠遺跡の遠望（上…平畠、下…八幡原遺跡）



写図2 1号住居址（上…西から、下…北から）



写図3 1号住居址（上…上層土器出土状況、下…検出中）



写図4 1号住居址の石囲い炉（下…炉の上の土器出土状況）



写図5 1号住居址と壁外の土器出土状況(下…壁外)



写図6 1号住居址 逆位の埋甕



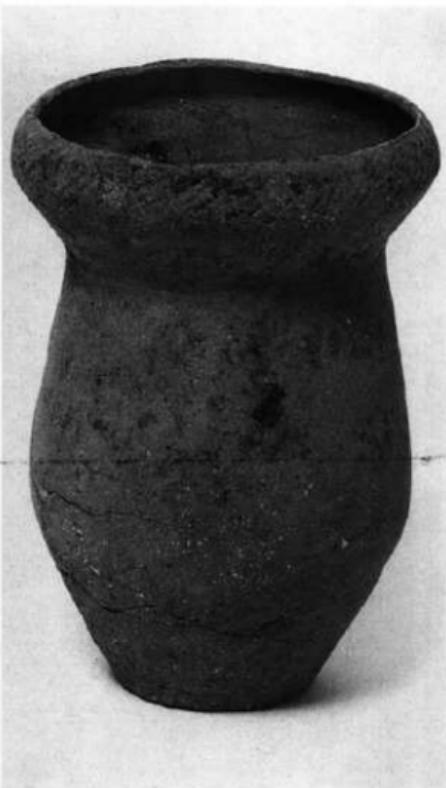
写図7 1号住居址 埋甕の断ち割り調査



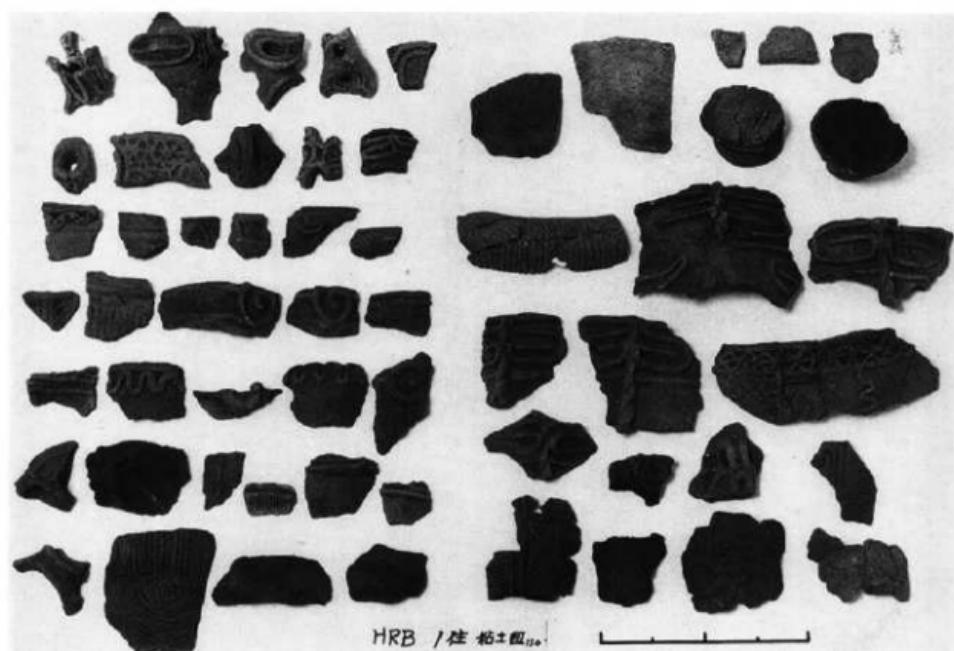
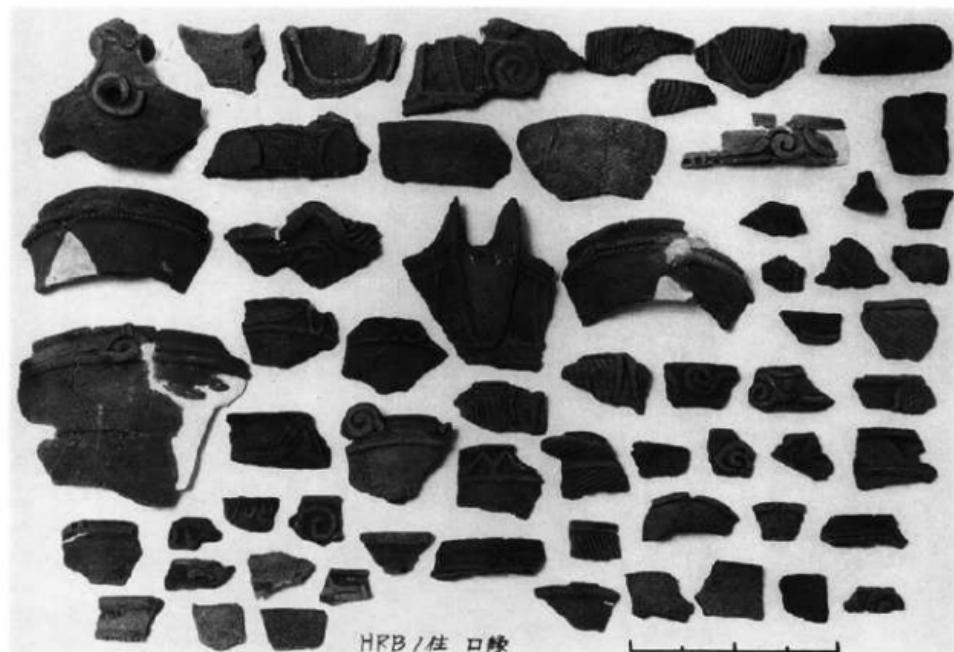
写図8 1号住居址 埋甕1



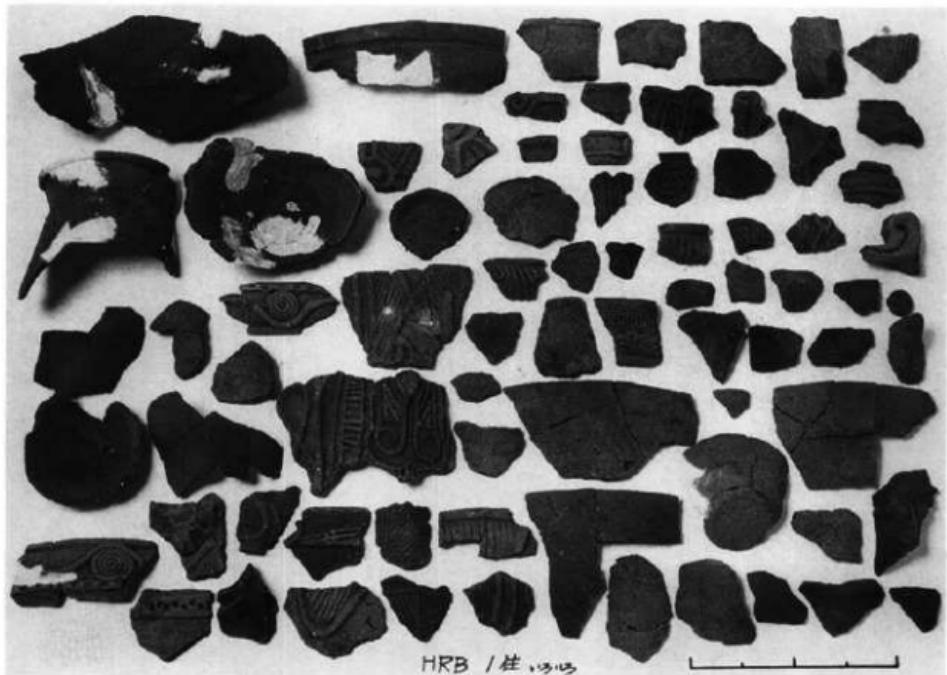
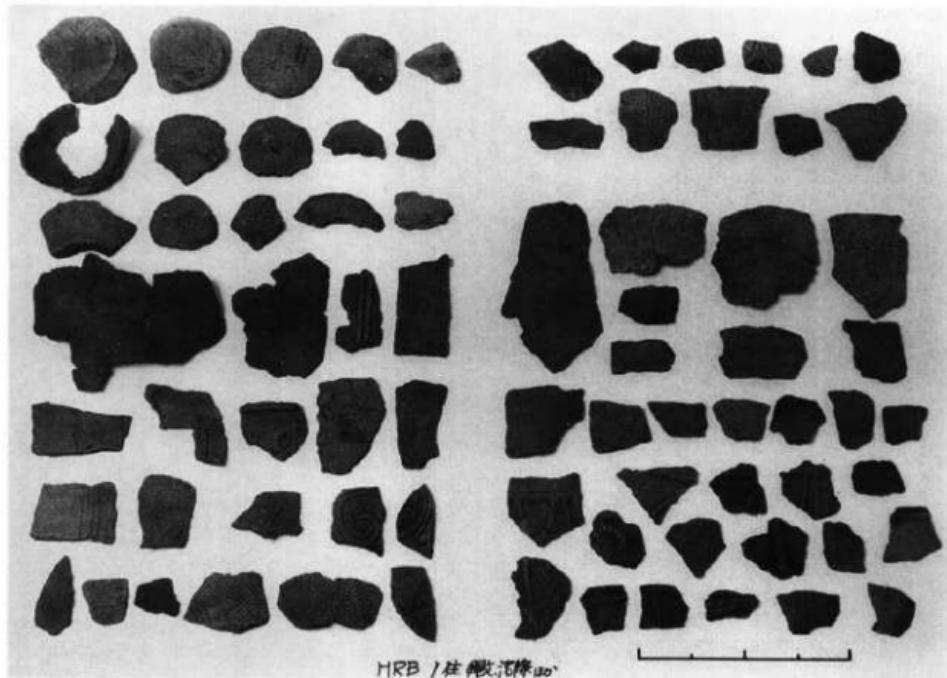
写図9 1号住居址出土土器（1）



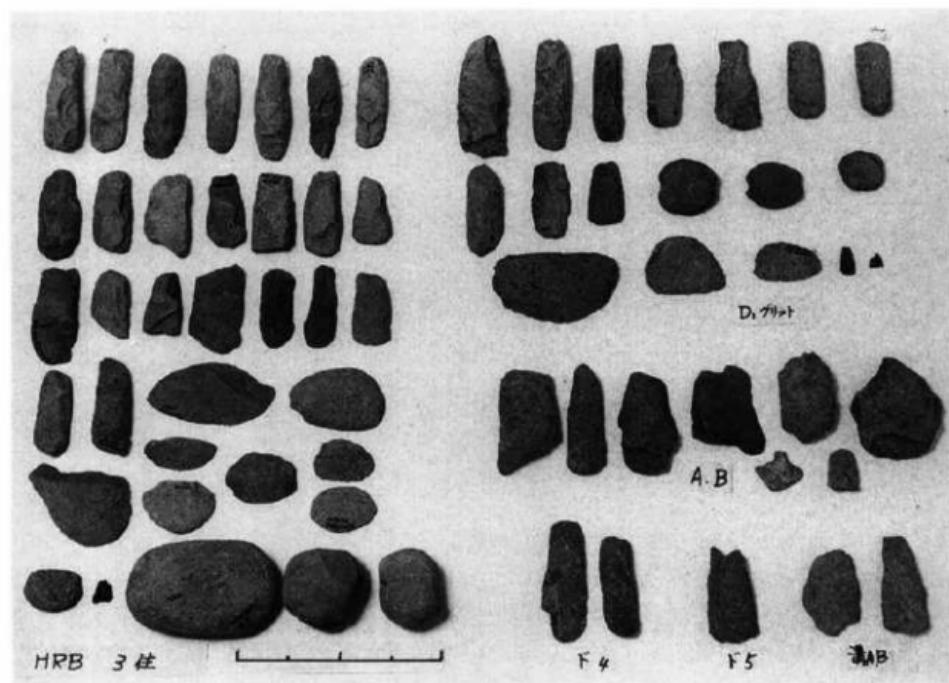
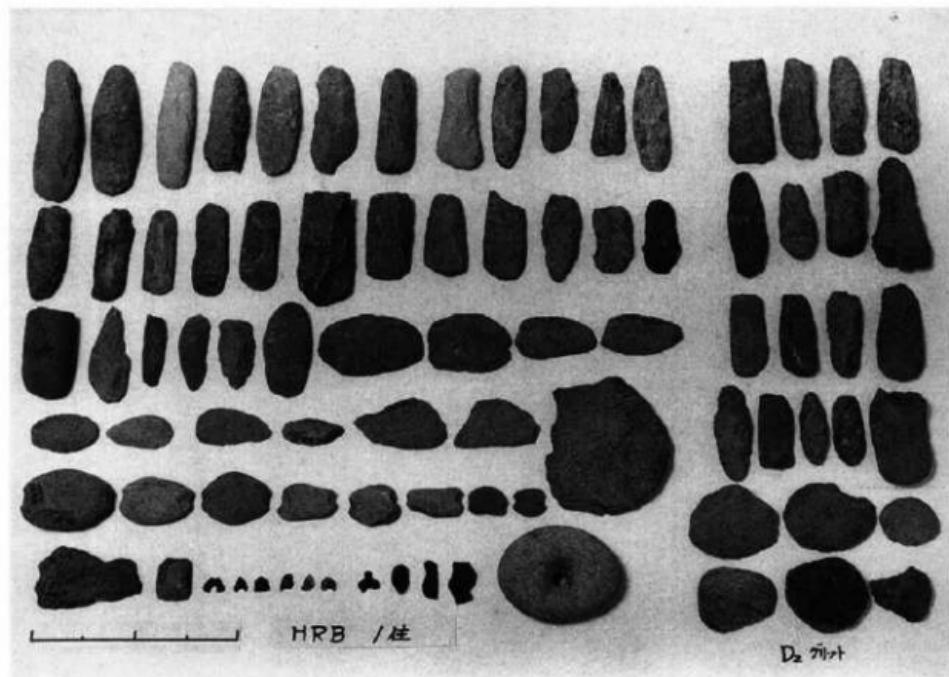
写図10 1号住居址出土土器（2）



写図11 1号住居址出土土器 (3)



写図12 1・3号住居址、その他の出土石器



写図13 3号住居址（上…東から、下…北から）



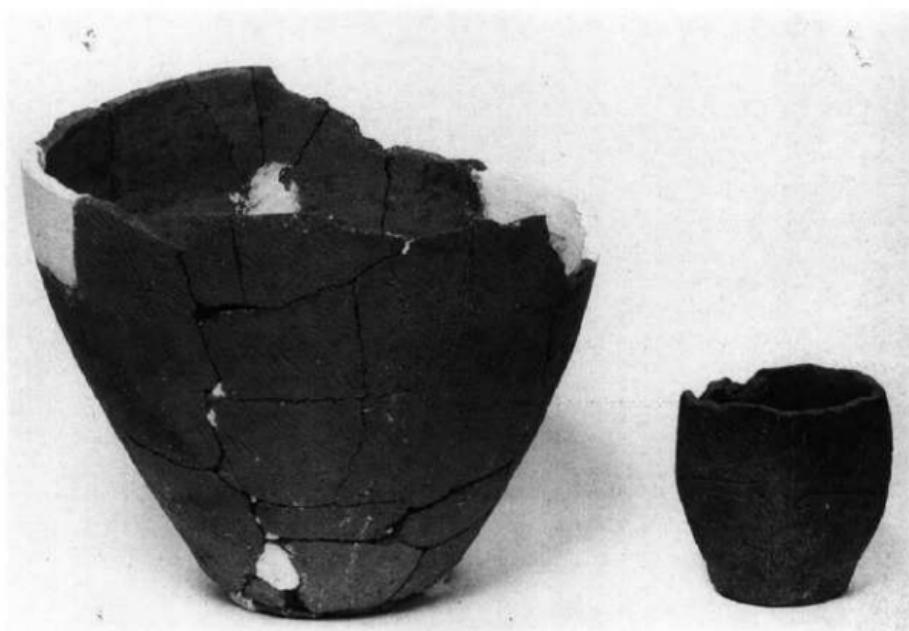
写図14 3号住居址 石囲い炉（上）土器出土状況（石の下に埋甕3）



写図15 3号住居址 埋甕出土状況(上…1、下…2・3)



写図16 3号住居址出土土器（下…埋甕3と1）



写図17 D 1 地区土塙群（上…南から、下…東から）



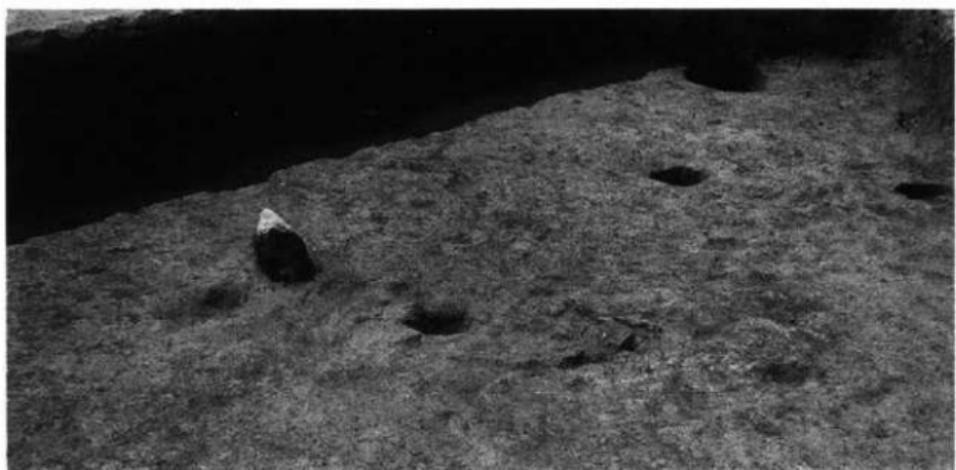
写図18 D1・D2地区土坑群(左…D1土坑13・D土坑15・D2土坑4)



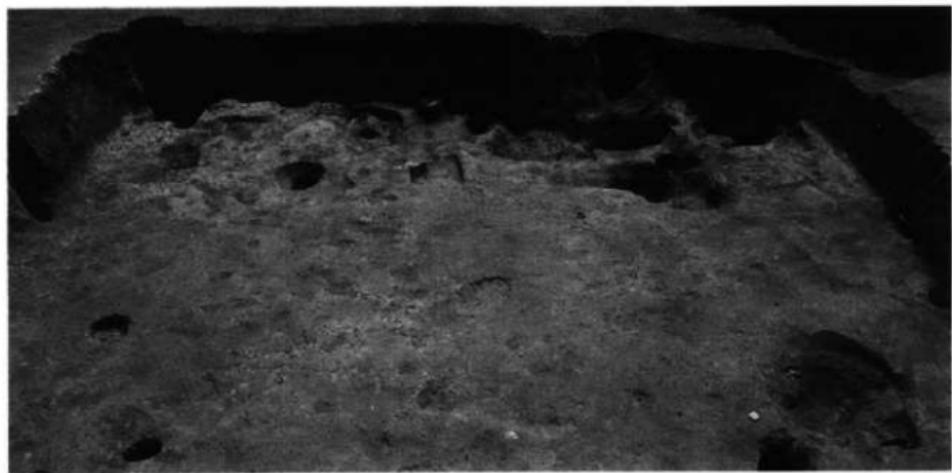
写図19 C地区土坑4と石棒出土状況



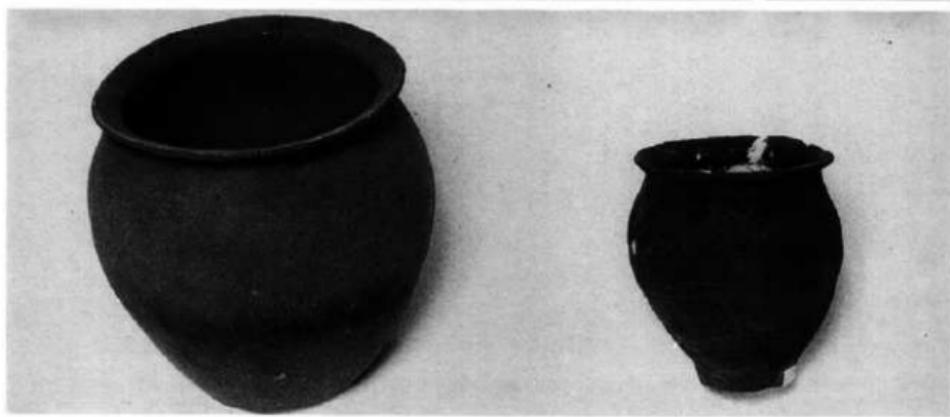
写図20 2号住居址 炭火材・埋壺炉1



写図21 4号住居址 南側の土塙・埋甕炉



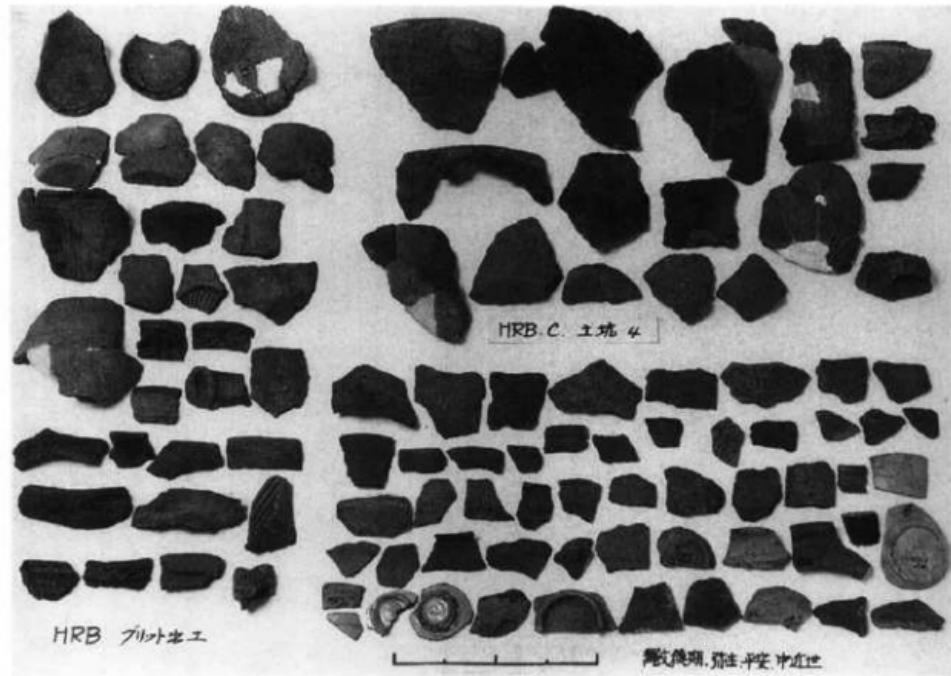
写図22 2・4号住居址出土遺物、C地区土坑4の石棒



写図23 B地区溝址 A・B



写図24 C地区土坑4、D2縄文時代後期土器集中地ほかの出土土器、調査風景



後記

平畠遺跡と八幡原遺跡については、昭和61年8月から農業基盤整備事業実施のため、その保護について再三にわたる協議や調整を重ねていたもので、昭和62年度の上黒田東部地区の農村基盤総合整備事業により、重大な影響を及ぼすと考えられる範囲について記録保存を図ることにいたしました。

当該発掘調査は国県の補助事業の一環として、昭和62年度にその事業の施行前に実施したもので、この間長野県教育委員会文化課と地元考古学者の専門的な指導を得ました。

現地は当該事業の施行後も引き続き畠等の用地として利用されるものであり、発掘が耕作等の支障となることをさける必要がありました。地元地権者等の理解と協力をはじめ、担当の産業課の努力と天候にも恵まれて発掘調査を進めることができたことは大変よろこばしいことです。

特に、昭和62年度はこの平畠遺跡、八幡原遺跡のほか、多くの発掘調査を実施するにあたり、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織し、これ等の調査の円滑な推進に資することとしたこと、発掘調査の具体的な実施にあたっては調査団組織の充実、各種の機材・資材の導入が不可欠でありましたが、一定の条件を整えることにより、日程的・物理的な困難を克服し、当初目標の調査が実施できました。

今回の調査結果は本書に記録したとおりですが、出土遺物など得られた数多くの資料は後世のため、学術的な資料としても、大切に保存し伝えていかなければならないものです。また、考古学上も大いなる貢献と思います。

末尾ながら、当該発掘調査のために献身的にあたられた今村調査団長をはじめ調査員・調査補助員、発掘作業に従事いただいた皆さんのご尽力、県教育委員会文化課や研究者の皆さんのご指導とご協力、地元土地所有者耕作者のご理解等、それぞれの立場においてのご協力に深甚の感謝を申しあげます。

昭和63年3月20日

上郷町教育委員会

平畠・八幡原遺跡

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

昭和63年3月

発行 長野県下伊那郡上郷町産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷 株式会社 秀文社

飯田市通り町1丁目2番地
電話(0265)22-0176

